

ぬ。

[九] 六難九易

こゝに於て、更に釋尊は、偈を以て多寶如來の證明には、遇ひ難き由を説かせられ、分身の遠く集まれるを頌して、流通を勧め給ふた、こゝに六難九易といふ大事な法門があるのである、その六難とは、

- 一、廣説難とて、若し佛滅後に、惡世の中に於て、能く此の經を説かん、是則ち難しと爲す。
- 二、書寫難とて、我滅後に於いて、若は自らも書き持ち、若は人をしても書かしめん、是則ち難しと爲す。
- 三、讀誦難とて、

佛滅度の後、惡世の中に於て、暫らくも此の經を讀まん、是れ則ち難しと爲す。

四、説法難とて、

我滅度の後に、若し此經を持ちて、一人の爲めにも説かん、是れ則ち難しと爲す。

五、問義難とて、

我滅後に於いて、此の經を聽受して、其の義趣を問はん、是れ則ち難しと爲す。

六、受持難とて、

我滅後に於いて若し能く斯の如き經典を奉持せん、是れ則ち難しと爲す。

と、經に説かれてある、我等がこの難信解の妙經を信解し得るといふ事は、如何にも尊く有り難い次第ではないか、日蓮上人は、身讀法華の喜を記して、

但し今、夢の如く寶塔品の心を得たりと、仰せられた。

九易といふ事は、

- 一、諸の餘の經典、其數恒沙の如しと雖も、説くこと是れ易し。
  - 二、須彌山を接て、他方に擲げ置く、是れ易し。
  - 三、足の指を以て大千世界を動かし、遠く他國に擲つは、是れ易し。
  - 四、有頂天に立つて、衆の爲に無量の餘經を説く是れ易し。
  - 五、人ありて、手に虚空を把り遊行する、是れ易し。
  - 六、大地を足の甲の上に置き、梵天に昇る、是れ易し。
  - 七、大火の中に、乾ける草を負ひて、焼ける、是れ易し。
  - 八、八萬四千の法藏、十二部經を持ち、演説し、聽者をして六神通を得せしむ、是れ易し。
  - 九、若し人、法を説き、千萬億無數の衆生をして、阿羅漢、六神通の益を得せしむ、是れ易し。
- 以上九易は、經意を取つて、以て述べた譯であるが、この易行を以てしても、尙且

つ易きではない、六難に至つては、まことに難中の難、法華經を以て、前品法師品に難信難解と、説かせられたのも尤である、斯様に有り難い難信難解の經を、持つのであるから、經文に、

若し能く持つこと有らば、則ち佛身を持なり。

とあつて、この經の一字一句を持つ人、如來の全身を持つといふのである、なんと憑しい事ではないか、この持ち難き御經を、暫らくも持つものは、釋迦佛の喜び給ふのみならず、諸佛も同様であり、天人も供養するとあるが、日蓮上人は、釋迦一佛の悦び給ふのみならず、諸佛出世の本懷なれば、十方三世の佛も喜び給ふべし、我即歡喜諸佛亦然と説かれたれば、佛も悦び給ふのみならず、神も即ら隨喜し給ふなるべし。

この寶塔品は、淺見輕信の徒、誤て經意を賊ひ、僞りて佛意に違はんことを恐るが故に、誠に慎重に用意して信心を強め、止暇斷眠の道念に住してこそ、始めて本品の

大旨、自ら鮮明に信解圓通することを得るであらう。

### 提婆達多品第十二

#### 〔一〕 本品の生起

前品の寶塔品に於て、多寶如來の證明に依り、法華經の眞實である事に就ては、最早一點の疑惑を挿む餘地もない、十方より集まれる分身の諸佛は、靈山會上の法座を莊嚴して、壽量顯本の遠序を起し、更に弘經の導師を募つて六難九易を擧げ、惡世の弘通を教へ給ふた。

そこで釋尊は、重ねて受持の信仰、弘經の志念を勵まさんと思召して、釋尊自からの往時の修行を説いて、求法の人、信仰の者は、難を忍び倦怠なく、勤加精進するならば、釋迦佛の如く正覺を成じ、惡人の提婆達多、女人の龍女さへ成佛する由を語つ

て、妙法の經力かくの如し、と宣示せらるゝのが、本品である、この提婆、龍女の成佛を、「二箇の諫曉」と稱するのである。

#### 〔二〕 題名の解釋

本品を「提婆達多品」と稱するのは、經に、  
未來世の中に、善男子、善女人有りて、妙法蓮華經の提婆達多品を聞いて、淨心に  
信敬して、疑惑を生ぜざらん者は、地獄、餓鬼、畜生に墮ちずして、十方の佛前に  
生ぜん、

とある文に依つたのであらうが、この一品には、提婆達多の事だけでは、龍女の事が後半品にあるから具さには、提婆龍女品とも稱す可きである、然るに經家は、前半品の事柄に依つて、提婆達多品と名付けたのである。

提婆達多の事は、誰れでも知つてゐるやうに、釋迦牟尼佛の從弟であつて、佛教傳道

に大なる反對をなし、釋尊の御身に、危害を幾度も加へ、五逆罪といふ恐ろしい大罪を犯し、生きながら地獄に墮ちたといふ位の佛敵である、それ程の極惡非道の者も、この法華經の經力で遂に成佛したのである。

〔三〕 提婆の成佛

釋尊が、一會の大衆に告げらるゝには、我れ往昔、法華經を求むる爲に、露些かたりとも懈倦する事はなかつた、長年の間國王となつて大願を發し、無上菩提を求めて心に退轉なく、菩薩行の六波羅密を修行し、その上身について居る七珍萬寶はいふに及ばず、國城乃至妻子身命をも、法の爲には惜まず、遂に國位を太子に譲り、鼓を撃つて、四方に法を求めた、誰れでも我が爲に、大乘經を説く人があるならば、終身召使となつて、供養し、給仕せんと宣言した。

時に阿私仙人が來つて、國王にいふには、我れに大乘妙法蓮華經といふ御經がある、我がいふ事、命することに違はずば、説き聞かせん、と、するとこの國王は、仙人の言葉を聞いて、譬へん方なき歡喜に充ち、誓つて終身、命を奉じて給仕しましよ

うから、我れに法華經を説き給へと、果を採り水を汲み、薪を拾ひ食を設け、乃至身を以て牀座と作しゝに、身心倦きこと無かりき、

と經にある如く、一生懸命に供養し、給仕し、難行苦行を重ね、年を経ること千歳であつた、この有様を行基菩薩が詠じて、法華經をわが得しことは薪こり、菜つみ水くみ仕へてぞ得し、と、これが我朝に於ける法華詠歌の始めである。

さてこの國王とは誰れであらう、外ならぬ我れ釋迦牟尼である、その時の仙人とは、今の提婆提多である、この提婆達多の善知識に由て、我れは成佛することを得たので

ある、と宣べられた、經に曰く、  
 等正覺を成じて、廣く衆生を度すること、皆提婆達多の善知識に因るが故なり、  
 と、この往時の因縁を以て、五逆罪の提婆達多も、當來の世には、必ず成佛して「天  
 王如來」となるであらう、と成佛の記別を授けられた、この提婆の成佛は、惡人成佛  
 の手本であつて、極惡の人もこの法華經に結縁することに依て、遂には經力を以て救  
 濟することを実證して、滅後の人々を諫曉されたのであつた。

この提婆の授記が終ると、多寶如來の隨身の菩薩で、智積といふ方が多寶如來に向  
 つて、最早法華の證明も終つた事であるから、世尊、當に本土に還りたまうべし、と  
 白しあげた、すると釋尊は、智積に、且く待て、文殊師利といふ菩薩があるから、會  
 つて共に話し合つては如何か、と差し止められた、この且待ニ須臾といふ文の中に、  
 大事な意味が含まれて居るので、既に迹門の大事は訖つたが、未だ本門の大事が顯は  
 れて居ないから、釋尊は、文殊に託して智積を留め給ふたのである。

〔四〕 文殊の化力

この時、文殊師利菩薩は、龍宮より歸へり來つて、釋尊多寶の二佛を禮拜し、智積  
 菩薩と相互に慰問し挨拶された。

智積は文殊に向つて、聞けば龍宮に御化導があつたとの事であるが、親しく教化な  
 された人々の數は、幾何ぞ、と尋ねたので、文殊は答へて、その數は澤山なもので、  
 口でも宣べられず、心でも思ひ測かられぬ程であれば、且らく待たれよ、所化の者共  
 を召してみせまじやうといつた。

この言葉の未だ竟らぬ中に、文殊菩薩の教化に與つた無數の菩薩は、寶蓮華に座  
 し、龍宮から打ち揃つて靈山に詣で、來て、佛前に到り釋迦牟尼佛を首め、一會の人  
 人に禮拜した。

文殊菩薩は智積に向ひ、これ等の衆は、皆我れが龍宮に於て、常に妙法華經を以て

教化したものである、といつたので智積は、この法華經は甚深微妙の經であるが、この經を修行して速かに成佛したものがありませんか、と重ねて問を發した。

### 〔五〕 龍女の出現

この間に文殊菩薩が、答へていはるゝには、婆竭羅龍王の女で、僅か歳は八つであつたが、中々の智慧もので、而して慈悲深く、仁讓の徳があつて、志意の和雅な彼女は、我が法華經を以ての教化の徳に、大菩提心を起して、確かに解脱を得たやうである、と、爾の時、智積は疑つて、先きにも聞いた如く、釋迦牟尼佛が成佛遊ばさるゝ迄には、無量に難行苦行し、功を積み徳を累ねて暫くも佛道の修行を廢せず、衆生の爲に身命を捨てさせられた事は、この三千大千世界に芥子ばかりのすきもないとの事であるのに、女であり而も畜身である龍女が、左様に易々と成佛しようとは、何んにしても承知し難い事である、といふ言の訖るを待たないで、龍王の女は、忽然とし

て靈山に現はれ、恭しく佛を敬禮し、次の偈を以て、釋迦牟尼佛を讚歎した。

深く罪福の相を達して、徧く十方を照したまう、

微妙の淨き法身、相を具せること三十二、

八十種好を以つて、用ひて法身を莊嚴せり、

天人の戴仰する所、龍神も咸く恭敬す、

一切衆生の類、宗奉せざる者無し、

この龍女の讚佛偈は、法華經の佛身觀として最も大切なものである、偈文の解釋は措くが、先哲は釋して、初の二句は如來の證智を明し、中の四句は如來の相の莊嚴を歎じ、後の四句は如來の威徳を稱するものであると、いふ迄もなく、法華經の佛身は、理法身でなく、有相莊嚴の尊形であることは、この偈に依つても明らかである。

### 〔六〕 龍女の成佛

この文殊智積の問答に、智慧第一の舍利弗も、餘りの事に驚いて、女人の身として龍女が、如何に法華經の功德に因るとはいへ、五障——一に梵天王、二に帝釋、三に魔王、四に轉輪聖王、五に佛身に作るを得ず——の身を捨て、成佛するとは、信じ難い横合より難詰した。

そこで龍女は、舍利弗のこの言を聞くや、一つの寶珠を釋尊に奉つたが、釋尊は速かに之を受納せられたので、龍女は我が成佛は、これよりも疾かであらう、と忽然として變じて男子となり、正覺を成し、南方無垢世界に往いて三十二相八十種好を以て身を莊嚴し、多くの衆生に妙法を説法したのであつた。

その時一會の大衆は、この事實を見て、流石の智積も舍利弗も、疑去り感極まつて、ひたすら經力の尊さを思ひ、默然として信受したのである。

この龍女の成佛は、法華經の一大特色であつて佛敎の女性觀に、一新面目を開拓したのである、爾前の經々が「外面如菩薩、内心如三夜叉」として卑んだ女性觀を、打

ち破つてその美德を發揮し、女性の爲めに萬丈の氣焔を上げた法華經の女性觀である、變成男子とは、涅槃經の、佛性を見るをば、方に丈夫、亦、男子と名づく、の義である、要するにこの一品は、提婆龍女の來佛を明して、行淺功深以顯經力を語るもので、傳敎大師は、

能化所化俱に歴劫——迂迴的成佛——なし、妙法經力即身成佛、

と釋せられたのは、これである、日蓮上人曰く、

佛世に出させ給ひて、四十餘年の間、多くの法を説き給ひしかども、二乗と惡人と女人とをば簡ひはてられて、成佛すべしとは、一言も仰せられざりしに、此經こそ、敗種の二乗も、五逆の調達も、五障の女人も、佛に爲るとは説き給ひ候つれ其旨經文に見えたり。

### 勸持品第十三

〔一〕 本品の生起

法華の功德の廣大なる事を説き給ふを聞いて、本品に於て、一會の大衆は弘經の發誓を成し、五類——迹化二萬の菩薩・五百の阿羅漢・八千の學無學・六千の諸尼・八十萬億那由他の菩薩——の大衆は起つて、持經を誓ふに至つた、法師品に於て、持經者の功德と、法華の經力を懇ろに明し、寶塔品には多寶の證明を以て、弘經の功深く、徳重きを示し、更に提婆品に至り、提婆龍女の成佛を擧げて、經力の甚大なる事を證せられたので、前にいふ五類の人々が、此土他土の弘經を誓願するのが、本品の生起である。

〔二〕 題名の解釋

この品を「勸持品」と稱する理由は、本品の中に説かれてある如に、樂王菩薩大樂

説菩薩及び二萬の菩薩と五百の羅漢、並に八千の聲聞及び橋曇彌、耶輸多羅比丘尼等が、持經を誓つた點からは、持品といふべきであるが、後半に如來が、八十萬億那由他の菩薩に、持經を勸め給ふたので、勸持品の題名が出たのである、故に委しくいへば、前段は「受持」後段は「勸持」といふべきである、『正法華經』には「勸説品」とあり、古本には「持品」ともあるのである、今はこれを總稱して、勸持品といふのである。

〔三〕 此土の弘經

二萬の菩薩は佛前に於て、誓願を成し、唯願はくば世尊、以つて慮ひしたまふ可からず、我等佛滅後に於て、當に此の經典を、奉持し、讀誦し、説きたてまつるべし、

と述べた、これはいふ迄もなく、上の寶塔品の三箇の告勅、提婆品の二箇の諫曉に應



じたものであつて、これが二萬の菩薩の此土弘經の發誓である。

#### 〔四〕 他土の弘通

斯く二萬の菩薩が、此土の弘經を發誓するのを見て、五百の羅漢、八千の聲聞達は思ふやうに、この娑婆世界の人は、難化の人々なるが故に、到底も我等は、その弘經の大任には耐へ難い、さればとて、この尊き法華經を弘通せずには居られぬわけであるから、化度し易き他の國土に於て、廣くこの經を説かんといつたのである、茲に注意す可きことは難化の衆生を避け、化度し易き他土の衆生を教化す可きを誓つたのが、次の安樂行の起る下拵である。

#### 〔五〕 姨妃の授記

佛の姨母憍曇彌は、其の部下六千の比丘尼と共に一心に合掌し、佛の尊顔を見上つ

て居られた、この憍曇彌の凝視には、如何なる默契があつたのであらうか、いふ迄もなく佛の授記を、志願されて居たのであつた、この憍曇彌は聖母摩耶夫人の妹であつて、悉達太子を御養育申し上げた姨母君である。

爾の時に釋迦牟尼世尊は、この養育の恩人である憍曇彌に、告げて仰せらるゝには、何故に憂の色をなして如來を凝視せらるゝのであるか、恐らく授記を求めらるゝのであらう、と一切衆生喜見如來の名號を與へて記別を授けられた。

次に耶輸陀羅尼は、釋尊出家前の妃であり、羅睺羅の生母であつて、同じく出家されて居たので、釋尊は、これにも授記せられて「具足千萬光相如來」と記された、曩の憂色に引き換へて、名も晴々しい一切衆生喜見如來といひ、具足千萬光相如來といひ、共に得もいはれぬ心地よき佛名である、茲に於て、授記せられた姨母聖妃及び其他の多くの比丘尼は、大に喜び、我等記を聞きて、心安く具足しぬ。

と、歡喜の情目に見る如く、感謝の意を白し上げた、前の龍女といひ、今又、この授記といひ、女人に取りては此上もなき喜びである、さればこれ等の比丘尼達も、他方の國土に於ける弘經を、誓願されたものであつた。  
以上が受持段であつて、これより勸持段となるのである。

### 〔六〕 菩薩の弘誓

爾の時に世尊、八十萬億那由佗の諸の菩薩摩訶薩を視はす、  
とあるが、これには大なる佛意があるので如來は暗にこの娑婆世界に於て、佛の滅後、この法華經を弘通せよと勸持せられたのであつた、この佛意を合點して八十萬億那由佗の菩薩は、此土の弘經を發誓したので、謂はゞ目と目で悟り、佛の勸めに従つて持を誓ふので、勸持品の名の起る所以である、この八十萬億那由佗の菩薩が、如來の守護の下に、佛滅度後、法華經弘通の爲には、如何なる幾多の大難に苦むとも、無量の

迫害に惱むとも、誓つて弘經せんと發願したのが、有名な勸持品の二十行の偈文である、この二十行の偈は、日蓮上人の一期の大事であつて、「身讀法華」の依文である、親しく二十行の偈に就いて味ふならば、何んともいへぬ壯烈な信情の涌き出るのを覺ゆるであらう。

### 〔七〕 三類の強敵

この二十行の偈を一言にしていふならば、末法に於て法華經を、如説修行の人があるならば、一難は一難毎に大難色まさるべく、敵人は一重、一重よりは二重、二重よりは三重と、強敵の現はる可きを豫言されたものである、而して行者を惱ます敵人は如何なるものか、これが所謂、三類の強敵である、一に俗衆増上慢、二に道門増上慢、三に潜聖増上慢。

一に俗衆増上慢とは、法華經の弘通に反對する俗人の輩であつて、經に、

菩薩の弘誓 三類の強敵

諸の無智の人、惡口罵詈等し、

及び刀杖を加ふる者有らん、我等皆當に忍ふべし、

とあつて、上人當年の東條景信の如き、平ノ左衛門頼綱の如きはこれである。

二に道門増上慢とは、同じ佛道修行の出家の中から起る法敵で、經に、

惡世の中の比丘は、邪智にして心諂曲に、

未だ得ざるを爲得たりと謂ひ、我慢の心充滿せん、

とあつて、上人當時の各宗の僧侶達は皆この種の敵人であつた。

三に潛聖増上慢とは、世間より生如來の如く尊敬せられて居る各宗の高僧達が、

法敵となることで、經に、

或は阿練若——閑靜の地——に、納衣——法衣——にして空閑に在りて、

自ら眞の道を行すと謂ひて、人間を輕賤する者有らん、

利養に貪着するが故に、白衣——俗人——の爲に法を説きて、

世に恭敬せらるゝことを爲ること、六通の羅漢の如くならん、

是の人惡心を懷き、常に世俗の事を念ひ、

名を阿練若に假りて、好みて我等が過を出さん、

とある、上人當時の極樂寺の良觀、建長寺の道隆の如きはこれであつて、世人に如來

の如く敬はれながら、上人の法華經弘通には、正面より大反對を試みた輩であつた、

「輕賤人間者」の經文は、人間を賤んで、生ける國家社會を無みするもの、謂であ

る。

そして偈文の後の十行には、法師品に説かれた弘經の三軌即ち衣座室の三軌を身に

體して、如何なる苦難迫害とも戰つて、必ず法華經を、末法に流傳しやうとの切なる

誓願が宣べられてある、日蓮上人曰く、

而るに法華經の第五の卷、勸持品の二十行の偈は、日蓮だにも此國に生れずば、殆

ど世尊は大妄語の人、八十萬億那由他の菩薩は、提婆が虚誑罪にも墮ぬべし、經に

云、有諸無智人、惡口罵詈等、加三刀杖瓦石等云々、今の世を見るに、日蓮より外の諸僧、たれの人か法華經につけて、諸人に惡口罵詈せられ、刀杖等を加らるゝ者ある、日蓮なくば此一偈の未來記は妄語となりぬ、惡世中比丘邪智心諂曲、又云、與白衣說法爲三世所恭敬一如六通羅漢、此等の經文は、今の世の念佛者、禪宗、律宗等の法師なくば、世尊は又大妄語の人、常在三大衆中乃至向國王大臣婆羅門居士等、今の世の僧等、日蓮を譏奏して流罪せずば此經文むなし、又云、數々見擯出等云々、日蓮法華經の故に度々流されずば、數々の二字はいかながせん、此二字は天台傳教未だ讀み給はず、況や餘人をや、末法の始めのしるし、恐怖惡世中に金言のあふ故に、但日蓮一人これをよめり。

末法に於ける法華經の修行者に取つては、斯る重大な意義のある、二十行の偈であるから、上と重複の嫌ひはあるが參考の爲に、全文を次に掲げて置く、唯願はくば慮したまふ爲からず、佛の滅度の後、

恐怖惡世の中に於いて、我等當に廣く説くべし、  
 諸の無智の人の、惡口罵詈等し、  
 及び刀杖を加ふる者有らん、我等皆當に忍ぶべし、  
 惡世の中の比丘は、邪智にして心諂曲に、  
 未だ得ざるを爲得たりと謂ひ、我慢の心充滿せん、  
 或は阿練若に、納衣にして空閑に在りて、  
 自ら眞の道を行すと謂ひて、人間を輕賤する者有らん、  
 利養に貪著するが故に、白衣の與に法を説きて、  
 世に恭敬せらるゝことを爲ること、六通の羅漢の如くならん、  
 是の人惡心を懷き、常に世俗の事を念ひ、  
 名を阿練若に假りて、好みて我等が過を出さん、  
 而も是の如き言を作さん、此の諸々の比丘等は、

利養を貪るを爲ての故に、外道の論議を説く、  
 自ら此の經典を作りて、世間の人を誑惑す、  
 名聞を求むるを爲つての故に、分別して是の經を説く、  
 常に大衆の中に在りて、我等を毀らんと欲するが故に、  
 國王大臣、婆羅門居士、  
 及び餘の比丘衆に向ひて、誹謗して我が惡を説きて、  
 是邪見の人、外道の論議を説くと謂はん、  
 我等佛を敬ひたてまつるが故に、悉く是の諸惡を忍ばん、  
 斯に輕めて、汝等は皆是佛なりと言はれん、  
 此の如き輕慢の言を、皆當に忍びて之を受くべし、  
 濁劫惡世の中には、多く諸の恐怖有らん、  
 惡鬼其の身に入りて、我を罵詈毀辱せん、

我等佛を敬信したてまつりて、當に忍辱の鏡を著るべし、  
 是の經を説かなが爲の故に、此の諸の難事を忍ばん、  
 我身命を愛せず、但無上道を惜まん、  
 我等來世に於いて、佛の所屬を護持せん、  
 世尊自ら當に知しめすべし、濁世の惡比丘は、  
 佛の方便、隨宜の所説を知らずして、  
 惡口して耀聲し、數々擯出せられ、  
 塔寺を遠離せん、是の如き等の衆惡をも、  
 佛の告敕を念ふが故に、皆當に是の事を忍ぶべし、  
 諸の聚落城邑に、其法を求むる者有らば、  
 我皆其の所に到りて、佛の所屬の法を説かん、  
 我は是世尊の使なり、衆に處して畏ら、所無し、

我當に善く法を説くべし、願はくば佛安穩に住したまへ、

我世尊の前、諸の來りたまへる十方の佛に於いて、

是の如き誓言を發す、佛自ら我が心を知しめせ、

〔漢譯經典は四句一行にて本書の二行か一行に相當す〕

### 安樂行品第十四

#### 〔一〕 本品の生起

迹門流通段の中の、結末たるこの安樂行品の説かれた所以は、勸持品に、末世に於てこの法華經を弘傳するには、俗衆増上慢・道門増上慢・潜聖増上慢の三類の強敵競ひ起り、慘憺たる大小の難、行者の身邊に集り、法華大法護持の容易ならざるを聽いた諸の菩薩中の淺位の行者は、心中に恐怖を懷き、戰慄した、そこで文殊師利菩薩が、これ程有難い法華經であるから、何んとかして、易く安樂に、修行する方法は

ありませぬかと釋尊に問ひ奉つたので、釋尊は、それならば示さん、と、説き出されたのが、この安樂行品の一品であるのである。

茲に一言加へて置かねばならぬ事は、この安樂行品の一品は、法華迹門を正意として弘通せられた天台一家の行法であり、化儀であるので、日蓮門下の人達の多くが、これを天台一家の依經であるとして、輕視する傾のあるのは、思はざるも甚だし事である、天台の時代は像法で、人も直くあつたが、正法、像法の時代の安樂行も、我等末法の者には、難行となつて居る事を、辨へなければならぬ、だから、この一品の經意をば、充分に味識す可きである、然なくしては、像末時代の意義、攝受折伏の化儀、信仰と觀念との行法の相違等の、大切なる天台と日蓮との教判の違目を確かむる事が能きない。

#### 〔二〕 題名の解釋

この品を「安樂行品」といふ事は、四安樂といつて、身、口、意、誓願の四つの安樂行を説き給ふた經であるのが、安樂の名のある以所である、經文には、

佛、文殊師利に告げたまはく、

若し菩薩摩訶薩、後の惡世に於て、是の經を説かんと欲せば、當に四法に安住す可し、とある、釋にも、

身に危険なきが故に安し、心に憂惱なきが故に樂、

身心安樂なるが故に、能く行を進む、

とある通りで、安樂行の三文字は生れたのである。

### 〔三〕 身安樂行

勸持品に於て、末世弘經の至難なる事を聽いた未だ修行の淺い菩薩達は、この經に受持弘法の志があつても、餘りの艱難に忍び難く、辛苦に耐へ難き故を以て、文

殊菩薩が、釋尊に安樂行を問ひ奉つた事は、前にも述べた所であるが、その内の第一の釋尊の御答は、身安樂行である、本品には次の如くある、

一には菩薩の行處、親近處に安住して、能く衆生の爲に是の經を演説すべし、

菩薩の行處、親近處に安住すとは、柔和忍辱の衣を着、一切法空の座に坐して、菩薩の行たる利他行を修行せよといふ事である。

身安樂を得んとするには、十種の惱亂を離れよと經に説いてあるが、之を三つに大別すれば、

一、弘經者の近かづく可からざるもの、

二、靜寂の場所を撰ぶ可きこと、

三、宇宙法界の眞理を觀す可きこと、

を説かれたのである、その十種の惱亂とは、一に豪勢、二に邪人法、三に凶險戲、四に旃陀羅、五に二乘衆、六に欲想、七に不男、八に危害、九に讒嫌、十に畜養であ

る、而して豪勢とは、國王王子大臣官長などの權勢者に近かすくと、善事はうつら  
 ずして、その權勢を見て、憍慢の緣になるから誡められたので、他の九も斯る意味  
 で、危きに近か寄らずして、身を安樂に住せしめよといふのである。  
 而して常に、靜寂なる處を撰んで坐禪をなせよ、天地法界の眞理を觀ぜよ、この振  
 舞、この修行を以て法華經を弘めよ、之れ身安樂である、と示されたのである。

〔四〕 口安樂行

口の安樂は、人及び法の過を説かず、行者を憍慢せず、又、長短好惡を歎毀せず、  
 嫌怨せず、約言すれば、言葉を慎めば、安樂にこの經を弘むる事が能きるといふので  
 ある、小乗の法を難問するものありとも、但大乘を以て解説せしむ可しとある、之が  
 口安樂である。

〔五〕 意安樂行

意の安樂には、嫉諂、輕罵、惱亂、諍競の心を慎み、一切衆生に對して大慈悲心の  
 心を起し、諸の菩薩に向つては大師の想を發し、諸佛世尊には慈父の念をなし、平等  
 に説法せよ、この初めの四つを慎み、後の四つを勵み行ふのが意安樂である。

〔六〕 誓願安行

誓願安樂とは、如何なるものであるかといふに、この經を弘むるには、非常に引い  
 大慈悲心を以て、難化の人々をも、法華一乘の道に導き救はねばならぬといふ誓願を  
 立てる事である、凡そ誓願といふ事は、何事にも大切な事柄である、誓願とは、たゞ  
 己れだけの獨斷でなく、十方三世の諸佛、諸天善神の照鑒の下に、一大志願を立て、  
 事を行ふ事である。



而して經文には、四安樂修行者の功德果報の廣大なる事を説かれて、

是の經を讀まん者は、常に憂惱なく、

又病痛なく、顔色鮮白ならん、

貧窮、卑賤醜陋に生れじ、

衆生見んと願ふこと、賢聖を慕ふが如くならん、

天の諸の童子、以つて給使を爲さん、

刀杖も加へず、毒も害すること能はじ、

若し人惡み罵らば、口即ち閉塞せん、

遊行するに畏れなきこと、師子王の如く、

智慧の光明、日の照すが如くならん、

若し夢の中に於いても、但妙なる事を見ん、

とあるが、斯かる得益得果は、實に四安樂行を修行することに依つて、始めて得らる

るのである。

### (七) 譬中の明珠

當品には、法華七大譬論の中の第六「譬中明珠の譬論」がある、釋尊はこの譬をもつて無量の國の中にあつて、名字をさへ聞くことを得難いこの法華經は、如來が容易に宣説し給はぬものであることを告げて、今日この靈山會に、法華經を聽く事の、如何に幸多きものであるかを語られて、迹門流通の最後であるこの一品は結ばれて居る、その譬中明珠の譬論とは、

文珠師利よ、譬へば、こゝに力強き轉輪聖王が、その威力を以て諸國を征伏せんと思ふが、諸の小王その命に従はず、王は遂に兵を起し、討伐して之を平定し、部下の論功行賞に當つて、或は田宅・城邑・衣服・金・銀・瑠璃・象・馬・車乘等の珍寶を、夫れぞれに與へるが、王の譬の中に藏せる寶珠のみは、容易に授與しない、何故かと

いふに、寶の中の寶である明珠は、妄りに授與す可きものでなく、最大の戦功者でなければ、決して與へないと同様で、

文殊師利、此の法華經は、諸佛如來の秘密の藏なり、諸經の中に於て、最も其の上  
に在り、長夜に守護して、妄りに宣説せざるを、始めて今日に於て、乃ち汝等が爲  
に之を敷演す。

一切の經典の中の經王であるこの法華經は、中々容易に宣説す可きものでなく、我  
れ釋迦牟尼も、四十餘年を過ぎ、今日始めて、汝等の爲に説き與ふるのであると仰せ  
られた、日蓮上人曰く、

惜哉、文武の不和があら玉、何くにか納めけん、嬉哉、釋尊出世の譬の中の明  
珠、今度我身に得たる事よ、十方諸佛の證誠として、いるがせならず、さこそは一  
切世間多怨難信と知ながら、争か一分の疑心を残して、決定無有疑の佛にならざら  
んや。

### 從地涌出品第十五

#### 〔一〕 本品の生起

釋迦牟尼佛は、前品に於て、この法華經を弘通し修行する安樂行を説かせられたの  
で、他方より來たれる無量の菩薩達が、異口同音に、この經弘通の使命を釋尊に請ひ、  
この娑婆世界に弘經せんことを請願したのである、すると釋尊は、快く許し給ふかと  
思の外、

止みね善男子、汝等が此の經を護持せんことを須ひじ、

と御許がなかつた、これには深い佛意があるのであるが、それは後に至つて述ぶこと  
と、しやう、如來は此等他方來の菩薩達に許されないので、本化の菩薩とて古き大昔  
の御弟子を、お召し出しになつて此の土の弘經の一大任務を、申付けられたのであ

る、彼等は何故自分等に御許がなくつて、新來の菩薩に命が下つたかがわからぬ、そこで、彌勒菩薩は、一會の大衆に代り、心中に動く疑念を述べ、疑惑を演べて釋迦牟尼佛に問ひ奉つたのである、この時に如來は、おぼろげに久遠の大事をほのめかして、答へさせられたのが本品である。

### 〔二〕 題名の解釋

本品を「從地涌出品」と稱する所以は、釋に、師嚴なれば道尊く、鞠躬して祇しんで奉ず、如來一度命じ給へば、四方より奔涌するが故に、從地涌出品と言ふ、とあつて、この釋に依り題名の來る所も明らかであるが、今少しく經文を引いて説明して見るならば、

娑婆世界の三千大千の國土、地皆震裂して、其の中より無量千萬億の菩薩摩訶薩有

りて、同時に涌出せり。

とあるのが、題名の依つて來る所である。

涌出とは、釋迦牟尼佛の天命直下、本化の大菩薩達が、歡喜身に徧充して、踊り出てさせ給ふた事を形容した文字である。

因みに、法華經の後半即ちこの涌出品より經末に至る迄の十四品が、正しく本門段である、而して本品の後半と壽量品と分別功德品の前半と、この一品二半が本門の正宗分といつて、法華一經の中の神髓であり、魂魄であり、中樞であり、肝要である事を心得て置かねばならぬ。

### 〔三〕 他方の弘經

釋迦牟尼佛が、法師・寶塔・提婆に於て、法華弘通の功德の甚大なる事を説き給ふを聞き、又、安樂行品に在つて、法華經を安樂に護持し、弘通し得らる可き由を聽き

知つた他方の無量の菩薩達は、佛に向ひ奉り、如來の滅後、この娑婆世界に於て、此の經典を護持し、此土に於て此の經を説き奉つる可し、認可し給へ、と請ふた、が然し、釋尊は斷乎として、これを拒絶せられたのである。

止みね善男子、汝等が此の經を護持せんことを須ひじ、所以は何ん、我が娑婆世界に、自ら六萬恒河沙等の菩薩摩訶薩有り、一々の菩薩に、各六萬恒河沙の眷屬有り、是の諸人等、能く我が滅後に於いて、護持し、讀誦し、廣く此の經を説かん。

此の經の意を要解するならば、自から一經の關門、本迹の起盡を了知する事が能きる、先づ天台大師は、止の一字を釋し給ふて、前三後三の六釋を立てられた、日蓮上人は、

地涌千界出現して濁惡末代の當世に、別付屬の妙法蓮華經を、一閻浮提の一切衆生に取り次ぎ給ふべき佛の勅使なれば、八十萬億の諸大菩薩をば、止みね善男子、と嫌はせ給ひしが等云々、又彼の邪宗の者どもの習ひとして、強ちに證文を尋ぬる事

之れあり、涌出品竝に文句の九記の九の前三後三の釋を出す可し、但し日蓮門下の大事之に如かず。

又曰く、仰せに云く、この門下の大事は、涌出品の前三後三の釋なり、この釋なければ、本迹化の不同、像法末法の付屬、本門迹門等の起盡、之れあるべからず、既に、止みね善男子の止の一字は日蓮門下の大事なり、秘す可し秘す可し、總じて止の一字は門下の明鏡の中の明鏡なり、口外詮なし、上行菩薩等を除いて、總じて餘の菩薩をば、悉く、止の一字を以て成敗せり。

尙ほこの外、開目鈔の下の卷には、更に懇るなる聖判がある、思ふに釋尊は、迹門に於て、寶塔提婆勸持安樂と次第順序を遂ふて、如來滅後の弘經を誓願せよと召慕し給ふたので、此の多くの發願弘誓者を見るに至つたのであらう、然るにこの無數の菩薩達の誓願を、峻拒し給ふたのは、上に引證した聖判の如くである、これ等の他方の

菩薩は、志願ありと雖も任重く道遠しで、始終一貫して、この尊無過上の大法を宣傳することは、到底も任に堪へ難きを知し召して、釋尊久成の弟子たる、本化の大弟子を召し給ふに至つたのである。

さて止の一字の前三後三の六釋とは、

迹化他方來の菩薩達を止め給ふのは、一、その任に非らざるが故に、二、此の土に縁淺きが故に、三、やがて釋尊の久遠を顯はさんが故である、重ねていはし、彼等は弘經の力足らざるが故、此の土の衆生には化導の縁が淺き故、更に久遠の本佛たる釋尊を、今日始めて佛に成らせられたものと思ふが如き迷情——これを執近の情といふ——を、破らんが爲である。

次に本化の大菩薩衆を召し給ふにも三義がある、一、此の土に縁厚きが故、二、我等衆生に利益多きが故、三、釋尊の久遠を顯はし得るが故である、斯く久遠の本佛が久遠の本法を、久遠の本化に、弘めさせ給ふのは、此の土に縁厚きが故である、縁厚

ければ利益自から多きが故である、而して久遠の本佛を顯本し得るからであるのである。

さればこの法華本門の大法は、他方の菩薩、迹化の菩薩衆の一指をだに染むることの能きないものであつて、將に壽量品に於て宣説さるゝこの本門の大法の弘通は、獨り本化の菩薩の大權に屬して居る、であるから文殊普賢、さては觀音勢至地藏等の、毫も關與す可き所でない、然るに本化の門下と名乗り乍ら、猶ほ迹門の迷見に墮し、此の日月の如き金文を輕々觀過して、末法に於ける法華弘通の大權が、本化上行菩薩にある事を忘るゝ輩は、愚も亦甚しといはねばならぬ。

【註】本化の菩薩、久遠實成の釋迦牟尼佛の最初からの弟子、久遠實成とは、壽量品に説く所の法門である、迹化の菩薩、久遠實成の釋迦牟尼佛の中間からの弟子、

〔四〕 地涌の六萬

斯く他方恒沙の無數の菩薩は、釋尊の勸募に應じ、弘經を發誓したが、釋尊は立所にこれを止め給ふたので、一會の大衆は、そも如何なることか、と、如來の御意を推し量りかねたる刹那、釋迦牟尼佛の聲に應じ、靈山の大地は俄かに震ひ裂けてその中より、さても威儀具足せる尊高無比の大菩薩衆、身皆金色で、三十二相八十種好に飾られて無量の光明を放ち、而も多きは六萬恒河沙の眷屬を召し連れ、少なきもそれぞれの眷屬を率ひて涌出せられた、この地涌の大菩薩は、釋迦多寶の二佛に向ひ、いと慇懃に禮拜供養を遊ばされた、その禮拜供養の間が、經には五十小劫を経たとあるが、その長い間、釋尊は、默然としてあらせられ、一會の大衆も皆同様であつた、然るにこの長い間が經に、

佛の神力の故に、諸の大衆をして、半日の如しと謂はしむ、

とある、この五十小劫の文は、中々六つかしい法門であるのであるが、要を取つていは、時間の圓融を語るものであつて、覺者は短に即して長を知つて五十小劫と思

ひ、惑者は長に即して短を、即ち半日の如き思をなしたのである、この時間の圓融の信解が能きるならば、今日の我れが、久遠からの永き生命のある我れである事を覺り、進んでは即身成佛の意義をも會得する事が能きる。

【註】一小劫、人壽十歳より百年經ることに一歳を増して八萬四千歳に到り、八萬四千歳より又百年ごとに一歳を減じて十歳に到る、この一増一減の間の時間を一小劫といふ、劫に就いての説明は、なほ磐石劫、芥子劫等があるが略す、要するに劫は、佛教の時間計算の單位である。

〔五〕 彌勒の疑問

本化地涌六萬恒河沙の無量の菩薩中に、一際目立ちて見上げ奉つるのは、一に上行菩薩、二に無邊行菩薩、三に淨行菩薩、四に安立行菩薩の四人である、日蓮上人曰く、  
其上に、地涌千界の大菩薩大地より出來せり、釋尊に第一の御弟子とおぼしき普賢

文殊等にもなるべくもなし、華嚴方等般若法華經の寶塔品に來集せよ大菩薩、大日經等の金剛薩埵等の十六の大菩薩なども、此の菩薩に對當すれば、彌猴の群る中に、帝釋の來り給ふが如し、山人に月卿等のまじはるにことならず、補處——佛の候補者——の彌勒すら猶迷惑せり、何に況や、其己下をや、此千世界の大菩薩の中に、四人の大聖まします、所謂、上行無邊行、淨行、安立行なり、此の四人は虚空靈山の諸菩薩等、眼もあはせ心もよばず、華嚴經の四菩薩、大日經の四菩薩、金剛頂經の十六大菩薩等も、此の菩薩に對すれば、翳眼のもの、日輪を見るがごとく、海人が皇帝に向ひ奉つるが如し、大公等の四聖の衆中にありしに、たり、商山の四皓が惠帝に任へしにことならず、巍々堂々として尊高なり、釋迦多寶十方の分身を除いては、一切衆生の善知識ともたのみ奉りぬべし。

この四大菩薩を首め、諸の菩薩達が、釋迦牟尼佛に禮拜供養、慇懃叮重を極め、親しみの情いと深く、親子の縁か師弟の契かと窺はれた、この有様に彌勒菩薩を首め、

一會の大衆は、そも如何なることぞと驚き怪しみて、この本化の菩薩は如何なる大士にましますか、と念ひ煩ひし時に、彌勒菩薩は一會の大衆を代表して問を發し、疑を決せんとしたのである、此の無量の菩薩は、何れの所より來たられしか、何の因縁を以て來たられしか、師は誰人にして如何なる法を持ち給ひしか、と問ふに至つた。經にもある如く、補處の彌勒は、釋迦牟尼佛に歸隨し奉りて、始め華嚴の法座より今に至る迄、暫くも如來の御側も離れ給はず、十方界に遊化して、一人として知らぬ菩薩はないのに、この無量の本化地涌の大菩薩衆の中に於ては、一人をも知らず、全く親しみを持つて居ない、さても不思議である、自からの身に比べて見るならば、同じ菩薩とはいひ乍ら、山人の月卿を見るが如し、海人の皇帝に向ふか如くである、と疑はいよいよ深く、斯くは本化出現の所由を問ふたのであつた。

〔六〕 略開近顯遠

さて是れ迄が、本門の序分であつて、所謂、涌出品の前半品である。

その時に釋迦牟尼佛は、一會に代つて問を發した彌勒の所念を察し、汝よくも所る大事の問をなせりと、歎美し給ふて、更にこれを誡め、

汝等當に、共に一心に精進の鎧を被、堅固の心を發すべし、

と仰せられた、一心は亂る、勿れ、被鎧は怠る勿れ、堅固は退く勿れ、と誡め給ふのであつて、釋迦牟尼佛は彌勒に對し、先づ第一にこの大菩薩衆の住所は、妙婆世界の

下方空中である、と、空中とは、釋に、

化して實に入らしむる、即ち空中なり、

とあるから、眞實の悟りの境界に入つた人の住所である、次に法と師とを明し給ふて、我れが久遠よりこのかた是れ等の衆を化導したので、法はいふ迄もなし妙法蓮華經を奉行し修行したのである、と答へられた、即ち住所を明し師を明し法を明して、以て彌勒並に大衆に告げ給ふた。

〔七〕 勅執生疑

然るに靈山一會の大衆は、なほ疑の雲深く、彌勒菩薩は釋迦牟尼佛に對し奉つり、重ねて他の疑を決せんとして問ふた、その問は次の如くである。

釋迦牟尼佛の菩提樹下に於ける成道は、四十餘年の僅かばかりの已前ではないか、然るに是等の大衆を化導せりとあつても、何うも一向に合點が行かぬ、考へて見るに如來は、太子として釋氏の宮を出で道場に坐してより已來、四十餘年を過ぎたるのみであるのに、如何に釋迦如來とは申せども、この少時に於て、かゝる無量の大衆を教化せられたとは、如何にしても世の人々が、信じ難いところでありませぬ、と殊更に不信に託して佛の答を請ふた、更に譬をもつて、

人あつて色美はしく髪黒く、年僅かに二十五なる若者が、百歳の老人を指さして、これ我が子であるといふならば、斯る事の信じ難きが如く、世尊が上に答へさせ給ふ



たところは、恰もこの例と同様ではありませぬか、と白し上げた。

元來、補處の彌勒が、佛語を疑ふことは、毫もないのであるが、經文にもある如く諸の新發意の菩薩達があつて、突然と威儀尊高、姿樣堂々たる大菩薩衆を、年若き釋迦牟尼佛が、是れ我が弟子なり、と仰せられては、如何にしても信じ難いから、却つて破法の罪業の因縁を起すやうな事があつては、我等現在の衆生の爲のみならず、未來の衆生の爲にもあらねば、何うか廣く説き明し給へ、と請ふた譯である。

いふ迄も無く、本化の大菩薩が出現せなかつたなら、釋迦牟尼佛は、印度降誕の小釋迦とのみ思はるのであつた、ところが、久遠の弟子上行等の大菩薩が、御弟子であるといふ事が顯はれたので、印度降誕の釋迦牟尼佛が、實は久遠實成の本佛にまします事が現はさるのである、今は異して、その由を彌勒不知の疑問に答へさせられたのである、これを「略開近顯遠」といふので、この疑を廣く決し給はん爲に、次ぎ下に「廣開近顯遠」の壽量品が、顯はるゝ次第である。

日蓮上人曰く、

外典に申す、或者道をゆけば路のほとりに、年三十計りなるわかものが、八十許りなる老人をとらへて打けり、いかなる事ぞととらば、此老翁は我が子なりなどと申すと、かたるにも似たり、されば彌勒菩薩疑つて云く、世尊、如來太子たりし時、釋の宮を出で、伽耶城を去ること遠からず、道場に坐して、阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得たまへり、是より已來、始めて四十餘年を過ぎたり、世尊、云何ぞ此の少時に於いて、大いに佛事を作したまへる、等云々、一切の菩薩始め華嚴より四十餘年、會々に疑をまうけて、一切衆生の疑網をはらす中に、此疑第一の疑なるべし、されば佛、此の疑を晴させ給はずば、一代の聖教は、泡沫にどうじ、一切衆生は疑網にかゝるべし、壽量の一品の大切なる、これなり。

### 如來壽量品第十六

#### 〔一〕本品の位置

由來、法華經は、如來五十餘年の説法に生命を興へ神髓を入れたものである、更にその法華八年の大説法の魂が、この壽量品である、即ち法華一經の精髓が當品である。

それは涌出品以前の迹門十四品にも、理の常住は説かれたが、未だ事の常住は御説にならなかつた、その事の常住とは、實に三世不滅の實在人格の一大本佛の顯本を、いふのである、勿論、迹門だけに本佛が説かれてないのみならず、法華以前四十餘年の諸經にも、一向に本佛は説き示されてゐないのである。

大凡そ、釋尊一代の經典を研究し、信仰せんとするには、先づ本佛の實在を意識しなければならぬ、本佛の實在がなかつたならば、天に日月なく、人に魂のなからんが

如きものである。

この大切な不滅の實在を、如來自からが身を以て、口を以て、意を以てお示しになつたのが當品である、であるから、この尊き意味が了解せらるゝならば、壽量品の位置も自から明瞭になる譯である。

本佛とは、宗學上非常に至難い學説、解釋があるので、その本佛の實在を顯説するのが、當品の眼目である、即ちこの壽量品は我等をして印度降誕の釋迦牟尼佛は、實には始めなき久遠の太初に覺り給ひし佛の顯れであることを認めしむるのである、この本佛の顯はるゝ時には、一代佛敎の諸佛、十方の分身は、一時に影を滅して、三世十方垂迹の無量の佛は、釋迦一佛に攝盡されて、法界には久遠本佛の外に餘佛なく、一切の佛は皆一つ本佛釋迦牟尼の影像であつて、恰も天の一月が池の萬水に、影を浮ぶると同様である、斯くして久遠本佛の光顯が、聽て、佛敎に眞の生命を賦與する事となるのである。

〔二〕 本品の神髓

壽量品の神髓は、「顯壽長遠」といふ事である、換言すれば、本佛釋尊の御壽命は、始めなき昔より、終なき終まで、生死もなく流轉もなく、常住不滅であるといふ事である、日蓮上人は、この壽命の大切な事を次の如く仰せられた、

命と申すものは、一身第一の珍寶なり、一日なりとも、これをのぶるならば、千萬兩の金にもすぎたり、法華經の一代の聖教に、起過していみじきと申すは、壽量品のゆへぞかし、閻浮第一の太子なれども、短命なれば、草よりもかろし、日輪の如くなる智者なれども、天死なれば生き犬にも劣る、

何んと適切な聖訓ではないか、天台大師は、或る長者が一子を愛撫して居つたところへ、人相見の大家が来て、この子は惜しい事には短命の相がある、到底も長者の後継者には成れぬと語つたので、長者夫婦は、忽ちにこの子を疎んじて、草の如に取扱

つたとの譬を説いて居られるが、如何にもこれは面白く窺はれる。

如來一代の經々が、縱説横説されて居ても、肝心の佛の壽命が常住でなくては、夢中の權佛である、權佛の設化、教化の利益は、泡沫夢幻的のものである、日蓮上人曰く、

一切經の中にこの壽量品ましますば、天に日月の、國に大王の、山河に珠の、人に神のなからんが如し、

壽品量を知らざる諸宗の學者は、畜生に同じ、不知恩の者なり。

〔三〕 本品の生起

前品に本化上行等の四大菩薩、及び無數の眷屬の菩薩の涌現に因る一會の疑問に、彌勒菩薩は、大衆に代つて衆疑を決せんと、釋尊に疑念を致して、如來の御答を促がしたのであつた、そこで如來は、この本化上行等の菩薩の住所は、娑婆世界の下方の

空中であつて、我れ釋迦牟尼が、自から教化し來たつた人達である、と答へさせ給ふた、然るにこの如來の應答に、彌勒菩薩を首め一會の大衆は、却つて疑念を増したので、彌勒は、更に譬を以て現在の我等の爲のみならず、未來の人々の爲にこの疑を決し、この惑を解き給へと請願した、この時に釋迦牟尼佛は、久遠實成の大事を宣説し給はんとして、茲に本品は生起したのである。

〔四〕 題名の解釋

「如來壽量品」とは、本品は釋迦牟尼佛の御壽命を詮量せられたる經典であるので、この題名があるのである。「正法華經」には、「現壽品」と題されて居る、如來といふ事は、如實の道に乗じて、來つて正覺を成す、といつて、解り易くいふならば、眞理の體現者といふ事である。

如來に就いては、三身論といふ大切な問題がある、三身とは、一に法身、二に報身、三に應身であつて、如來にはこの三つの御徳が、その身に具はつて居る、この三身の名前の出て居るのは「金光明經」と「法華論」とであつて、先づこの三身を、我が身に就いて考へるならば、いと平易に了解する事が能きる、即ち、我等がこの身體は法身で、智慧は報身で、能力は應身である、これを教義の上にいふならば、眞理の結晶が法身であり、智慧の結晶が報身であり、慈悲の結晶が應身である、斯くこの三身は、如來の一身の上に觀る三方面であつて、我等はこの三方面からして、如來を仰ぎ奉つるのである、天台大師は、壽量品の中にこの三身の依文を摘出して、  
法身、如に非ず、異に非ず、三界の三界を見るが如くならず、  
報身、如來は如實に、三界の相を知見す、  
應身、或は己身を示し、或は他身を示し、或は己事を示し、或は他事を示す、  
この文は、本文の要解の節に解釋するとして、今は略する事とする。

この三身論の解釋に就いては、その發達の道程を大別して、天台已前、天台大師、日蓮上人の三つとする事が能き、天台已前の學説は、三身を差別的に見、其の中に於て、法身の常住不滅を論じた、この學派の説を否定して、三身は各々差別のものでなく、互に不離の關係に立つて居るものとして、三身相即論を立て、而もその中に於て、報身を中心としたのが天台大師の學説である、然るに日蓮上人に至つては、三身の相即不離を説くことは、天台一流の如くであるが、彼の報身中心説を去つて、應身を以て中心、正位とし、この應身の常住不滅、無始無終の妙義を光顯し、發揮せられたのであつた。

三身論は、四身論、五身論、六身論、七身論、八身論、九身論、十身論等の發展を見たが、要するに三身論の説く所の外に、大した出色の點もなく、却つて多岐に流るるから、今はたゞ、本品の題名の解釋に因んで、三身の名稱の要解のみをした譯である。

然し、今尙、語る可き一つの要義がある、それは法身が常住である事には異論はないが、報身、應身の二身は、無始常住ではなからうといふ學説に就いては、然し斯く、法身のみの常住を容して、報應の二身の常住を認めないのは、未だ壽量品の教義が了解されてゐない所から起つた事である。

眞理の體である法身の常住はいふ迄もない、故に「法身の常住は諸經の常談」といはれて居る、然るに報應の二身は、智慧と慈悲とであつて、この二つは釋迦牟尼が、この世界に出現されて始めて得られたものであるから、新しく出來たもの、やうに思はれるので、始あるもので、常住のものでなく、遷滅す可きものであると論ずるのである、然るにこの壽量品には、三身の常住を明かし、三身即一身の應身常住が、説き示された。

止觀の第五に三身の關係を述べて、天界に如意寶珠といふ珍寶がある、形は芥子の如くで、巧妙な能があつて、人の心に稱ふて淨妙な、色・聲・香・味・觸を出し、又、

金銀等の七寶を降らす、これ等の種々の寶は、寶珠の内に蓄へてあるのでもなければ、外から取り入れた譯でもなく、而して幾干雨らすとも盡きず亦増さず、恆に人の意に従ふて、多くも雨らし又少くもなくも雨らすことが自在である、この如意寶珠を三身に譬へて見るに、珠體は法身、光輝は報身、種々の寶は應身と見らるゝであらう、といふ意味が説かれてある、この釋意に依つて見ても、三身は各別に觀る可きものでなく、三身即一身であり、一身即三身であつて、三身は相即し、俱に常住不滅のものとな見なければならぬ、而も日蓮上人は、三身即一の上に應身為本——中心——慈悲中心が壽量品の經旨であるとして、曰く、

雙林最後の 大般涅槃經四十餘卷、其外の法華前後の諸大乘經に、一字一句もなく、法身の無始無終はとけども、應身報身の顯本はとかれず、

と、日什大正師曰く、

三身即一の應用を宣べて、塵點久遠の 大悲を顯はす、

と、これ等の聖判を拜するに至つて、愈々、明瞭に前述の意義を、確かむることか能きる。

〔五〕 本品の組織

涌出品に於ける本化上行等の大菩薩衆の涌現は爾前四十餘年にも、迹門十四品の説會にも、未曾有の出來事であつた、補處の彌勒すら迷或したのであるから、況んや、それ已下の一會の人口に於ておや、靈山の 大衆が怪訝の念に打たれたのも當然である、而もこの無量の大菩薩衆は、釋尊の御弟子であると聽いて、假令、如來不思議の神通力の故とはいへ、如何にしても成道後、僅かに四十餘年の短かい間に、この大衆を化導遊ばされたとは承知し難い、とその疑は一段と高められたので、彌勒菩薩は、一會の大衆の疑惑を代表して、その説明を如來に請ひ奉つた、そこで釋尊は、この彌勒不知の疑問に託して、久遠實成の 大事を明さるゝのが、この壽量品である。

一品は、長行——散文——と偈文に別かれてゐて、長行は法説と譬説の二段から成つて居る、先づ經文は、三誡・三請・重請・重誡のいと莊重な儀式を以て、一切世間の人々は、我れ釋迦牟尼を、印度に降誕し、十九出家、三十にして始めて成道せる如來とのみ思つて居るが、實は、左様な若々しい佛ではなく、實は始めなき始め久遠の昔よりの如來である由を、

我實に成佛してより已來、無量無邊百千萬億那由佉劫なり、  
 宣説遊ばされ、重ねて「五百塵點劫の譬論」を以て、この久遠實成の本佛なる事を説き論された。

而して我れ釋迦牟尼は、この無始久遠の初より、常にこの娑婆世界を中心し、又十方の餘處の國にも在て、一切衆生の化導に任じて居るのである、この久遠已來の永い間に於ける、衆生教化の中間に於ては、化導の善巧方便として、然燈佛その他の名を以て、世に應化を垂れた事もあれば、その教化の期間に長短の相違を示して世に出現

し、一切衆生の誘導に當つた事もあつた、今日出世しても、徳薄く垢重し、迷へる多くの衆生の爲には、若くして出家し、伽耶城を去ること遠からず、菩提樹下に於て佛道を成じた始成正覺の佛であるとも説くが、實には、我が成佛してより已來、久遠の永き壽命の常住不滅の如來であることは、前に説いた如くであつて、世の衆生を教化して佛道に入らしめんが爲に、斯る説をもなしたのであると仰せられ「六或の法門」を説いて、如來大慈悲の意輪より發する形聲の二益を示し、次で「六句の知見」を擧げて、佛知の廣大を歎美された、而も如來は自から、果上の妙徳を宣揚遊ばされんとして、

我れ本、菩薩の道を行じて成せし所の壽命、今猶未だ盡きず、復上の數に倍せり、と本因の修行を明された。

然るにこの常住不滅の本佛が、入滅涅槃を示現する所以は何か、それは決して他ではない、如來が久しくこの世に在るならば、凡夫は却つてこれに馴れ、善根を植えず

五欲に著し、憍態を起し、難遭の念、恭敬の心を生じ難いから、假りに滅度を示して、衆生に渴仰、戀慕の心を生ぜしめ、一切の善根を修行せしめんとする、大慈悲の發動である、と現滅の利益を語られた。

こゝに法説は終つて譬説に移り、「良醫治子の譬諭」を以て、更にこの道理をいと懇切に説き示され、最後に如來の所説の、一切虚妄ならざる由を結び、戀佛愛法の念を勸められて、長行は終り、偈文に入りて、その末文に、

毎に自ら是の念を作す、何を以つてか衆生をして、無上道に入り、速かに佛身を成就することを得せしめんと、

と説き、一經の眞髓たる、本佛毎自の大悲願を以て、その結歸を告げて居るのである。

この偈文は、如來久遠の壽命を、宣揚するのであるから特に「久遠偈」、又はこの偈の最約の一句である、「自我得佛來」の「自我」の二字を取つて、「自我偈」とも稱し

法華經 中最も肝要な偈文であるが、その要解竝に良醫治子の譬諭は、本文に入つて詳説するから、此所には差し措いて、ただ一品の組織の大略を述べたのである。

〔六〕 無比の説相

如來五十年の説法は、その儀式何れも、誠に莊嚴幽微であるが、この壽量品の説相は、眞に慇懃可重を極めて、曾て一代の經中、その比類がない。

先づ釋迦牟尼佛は、前の彌勒不知の疑問に答へさせ給ふに、三誠三請重請重誠を以てせられた、その三誠とは經文に、

爾の時に佛 諸の菩薩、及び一切の大衆に告げたまはく、諸の善男子、汝等當に、如來の誠諦の語を信解すべし、復、大衆に告げたまはく、汝等當に、如來の誠諦の語を信解すべし、又復、諸の大衆に告げたまはく、汝等當に、如來の誠諦の語を信解すべし、



と、斯く「如來の誠諦の語を信解すべし」と三たび繰り返して誠められたのを、三誠といふのである、この莊重な如來の三誠に應じて、大衆は三請して大法の信受を誓つた、經に、

是の時に菩薩大衆、彌勒を首と爲して合掌して、佛に白して言さく、世尊、唯願はくば之を説きたまへ、我等當に、佛の語を信受したてまつるべし、是の如く三たび白し已り、

とある、重ねて彌勒及び大衆は、佛語を信受し奉つる事を白し上げ如來は重ねて信解すべしと誠められて、重請重誠の儀式があつた、斯くの如き懇懃町重な説相は、全く餘經にその類例のない所で、如何に壽量品の大法が尊いものであるかを、推察する事が能きやう、正にこれから本之に入つて、一品の要解を試みる。

七 如來の正答

斯く三誠三請重請重誠の儀式があつて、世尊は、之に告げて宣はく、汝等諦かに聽け、如來秘密神通之力を、一切世間の天人、及び阿修羅は皆、今の釋迦牟尼佛、釋氏の宮を出で、伽耶城を去ること遠からず、道場に坐して、阿耨多羅三藐三菩提を得たまへりと謂へり、然るに善男子我れ實に成佛してより已來、無量無邊百千萬億那由佉劫なり。

と、印度降誕の佛陀は、十九出家三十成道の新しい、佛ではない、實は久遠實成の本佛の應現である、と、一大宣言を遊ばされたのであつた、この大宣言こそ、實に釋迦牟尼出世の本懷である、而してこの宣言に由て、爾前四十餘年の長い間に書かれた一代の佛敎は、こゝに始めて點睛さるゝのである、この經文の中の、「如來秘密神通之力」の八字は、久遠本佛の妙體と妙用とを説き示す肝文である、固より如來の體用は、不離であつて常住である、この不離であつて常住である如來の體と用との眞實の有様を、光顯せんとするのが、壽量一品の主眼である、日蓮上人曰く、

如來の正答

此等の二の大法——二乗作佛と久遠實乘——は、一代の綱骨、一切經の心髓也、迹門方便品は、一念三千、二乗作佛を説て、爾前二種の失一を脱たり、然りと雖も未だ發迹顯本せざれば實の一念三千も顯はれず、二乗作佛も定まらず、水中の月を見るが如く、根なし草の波上に浮ぶるに似たり、本門にいたりて始成正覺を破ぶれば、四教——法華經已前の經々——の果をやぶる、四教の果をやぶれば四教の因やぶれぬ、爾前迹門の十界の因果を打破て、本門の十界の因果を説き顯はす、此即、本因本果の法門なり、九界も無始の佛界に具し、佛界も無始の九界に備て、眞の十界互眞、百界千如、一念三千なるべし。

この如來の壽命の無始常住なる事を、數に寄せて非數を示さんが爲に説かれたのが、彼の有名な「五百塵點劫の譬論」である、その譬論は、

五百千萬億那由佗阿僧祇——那由佗は百萬億、阿僧祇は無數と譯す——の三千大千世界を、或人が抹きて微塵とし、東方五百千萬億那由佗阿僧祇の國を通り過ぎる毎に一塵を下し、斯様にして行き過ぎ、始め抹いたその無量無數の微塵が盡きた時、最初から通り越して來た無數の國は、如何程であらうか、と彌勒菩薩に尋ねさせ給ふた、すると彌勒は、逆もこの無數の國は、計算する事も、思ひ測ることも能きぬ、と申し上げた、その時如來は、又、大菩薩衆に告げらるゝに、今度は前に塵を著いた國も著かぬ國も、皆塵としてその塵の一つづゝを一劫の間の時間とせんに、我れ釋迦牟尼が成佛してより今日に至る迄の歲月は、この數に過ぎたること、百千萬億那由佗阿僧祇劫の永い間である、と答へられた。

[八] 久遠の應化

斯く釋尊は、五百塵點劫の譬論に寄せて、本佛の壽命の久遠なることを説き示されたので、彌勒を首め一會の大衆は、始めて印度降誕の釋迦牟尼佛は、實は久遠の本佛にましますことを、信解したのである。

然らば、この久遠の本佛の久遠の壽命には、如何なる尊く有難い大事があるのであらうか、この壽命の久遠といふ事は、取も直さず、本佛の化導の久しきを顯はしたものである、經に、

是より來た、我れ常に此の娑婆世界に在りて、衆生を利導す、

とあつて、久遠の本佛の大慈大悲は、久遠より已來、我等この娑婆世界の衆生を教化し給ふて、今日に及んで居るのであつて、本佛の久遠の壽命は、即ち久遠の應化である。

世の人々が、藥師を尊び、大日に依り、彌陀を崇むなどの迷妄の因て來たる所は、この久遠常住の本佛を眞に意識せぬが故である、如何に一代佛敎を通覽し、熟讀しても、壽量敎義の大事、久遠實成の大法を信解しなかつたならば、徒事であらう、佛學の諸士、至心に留意す可きである。

### 〔九〕 果上の應現

この久遠の應化は、釋尊果上の應現であつて、果上は本果の上といふことで、妙覺極果——成佛得脱——の徳の上から起る種々の應現を稱して、茲に果上の應現といふのである、換言すれば、如來が衆生濟度の爲に、種々なる身を現はさるゝことである。

久遠實成の本佛が、幾億無量の衆生を教化し給ふその方法に於ては、本來久遠の本佛ではあるが、その中間に於て、然燈佛等と説き、又復涅槃に入るともいはれてある、すると別に佛があるやうに思はれるが、決して左様ではない、實には久遠本佛の果上の應現であるのである、この果上の應現といふ大事な經旨を、確乎と合點して置かなくては、佛陀觀に迷妄を生じ、折角の信仰に、正しき依止處を失ふに至るであらう。

經に、

諸の善男子、是の中間に於て、我然燈佛等と説き、又復、其涅槃に入ると言ひき、是の如きは皆方便を以て分別せしなり、

とある、經文の意、明らかに衆生教化の爲に、方便を以て然燈佛など、説き、又涅槃を示したと説いたので實には衆生化導の爲の本佛の應用であつたのである、それであるから經に、

諸の善男子、若衆生有りて我が所に來至するには、我れ佛眼を以て、其の信等の諸根の利鈍を觀じて、應に度すべき所に隨つて、處々に自ら名字の不同、年紀の大小を説き、亦復、現じて當に涅槃に入るべしと言ひ、

と、この經文に依るも、本佛大慈の佛眼には、濟度すべき所に隨つて、種々に無量の施化があるのである、であるから佛名は、何んと説かれてあらうとも、一久遠本佛の大慈大悲の應現に過ぎないのである、名字の不同、年紀の大小は釋に、

形を現すれば、則ち名字あり、名に依つて體を召す、機に大小あれば、形に勝劣あり、

とあつて、幾億無量の衆生の機根に、千差萬別の欲求があるから、大小淺深に隨つて、暫く本佛の本體を隠し、權りに九界に種々の身を現じらるのである、故に如何に佛名は不同であらうとも、實には久遠本佛に他ならぬのである。

【註】我説然燈佛等又復言其入於涅槃の文に就き、『瑞應經』に、釋迦牟尼佛、往昔、摩納梵志として然燈佛の所に詣で、修行し得記し作佛したと説かれてあつて、釋尊の因位の修行を記されてある、從つて釋尊と然燈佛とは、別佛として古來解釋されてあるが、これとても釋尊の果上の方便であつて、壽量の顯本を語る本化の信仰の上からは、釋尊の中間に於ける衆生濟度の上に、我れが然燈佛なりと名字の不同を説かれたものを見て、然燈佛は即ち釋尊であつたのであると解釋する事の、敢て失なきを信すると共に、これが正しい本化の見解であると思ふ。

〔十〕 形聲の二益

我等衆生を愍憐し給ふ本佛の大慈悲心は、須臾も息み給はず、御化導の方法を窺ひ奉つるならば、形聲の二益となつて、不斷に我等の頭上に垂れて居る。

形益とは、本佛が種々なる妙相を以て利益し化導し給ふことで、聲益とは、妙なる梵音を以て説法教化し給ふことである、經典の一偈一句は本佛大慈の意輪、即ち御心が顯はれて説法となり、説法が記録されて文字となつたのである、日蓮上人曰く、佛の御意あらはれて法華經の文字となり、文字變じて又佛の御意となる、されば法華經をよませ給はん人は、文字と思食す事なかれ、すなはち佛の御意なり、と仰せられてあるから、法華經は即ち佛の御意であるのである。

この形益は、如來身輪の徳で、聲益は、口輪の徳である、この身口の二輪は、如來大悲の意輪より起るのであつて、この三輪の妙化に因て我等は、救濟せらるゝのである。

(十一) 六或の説示

上の形聲の二益は、經文に「六或の法門」となつて説かれて居る、經に云く、諸の善男子、如來の演ぶる所の經典は、皆衆生を度脱せんが爲なり、或は己身を説き、或は佗身を説き、或は己身を示し、或は佗身を示し、或は己事を示し、或は佗事を示す、諸の言説する所は、皆眞實にして虚しからず、と、これを六或の經文といつて、形聲の兩益を語る如來應現の依文である、或説は聲益、或示は形益である、さればこの六或の文は、三世に常住不滅の本佛が、我等を憐愍救濟し給はんとして、十方三世に身を現し、法を説き給ふことを示すのである。己身は佛界の身をいふのであつて、佗身は九界の身をいふのである、己事は佛界の所作をいふのであつて、佗事は九界の所作をいふのである。而して或説は口輪説法で、或示は身輪示現である、尙六或の法門に就いては、序辭

中の四]法華經の佛陀觀を參照せられたい、日蓮上人曰く、  
 法華經壽量品に云く、或は己身を説き、或は陀身を説く等云々、東方の善徳佛、中  
 央の大日如來、十方の諸佛、過去の七佛、三世の諸佛、上行菩薩等、文殊師利舍利弗  
 等、大梵天王第六天の魔王、釋提桓因王、日天月天明星天、北斗七星二十八宿、五星  
 七星八萬四千の無量の諸星、阿修羅王、天神地神王、山神河神宅神里神、一切世間の  
 國主とある人、何れか教主釋尊ならざる、天照太神、八幡大菩薩もその本地は教主釋  
 尊なり、例せば釋尊は天の一月、諸佛菩薩は萬水に浮べる影なり、釋尊一體を造立  
 する人は、十方世界の諸佛を作り奉つる人なり、譬へば、頭を振ればかみゆるぐ、  
 心はたらけば身動く、大風吹けば草木しづかならず、大地動けば大海さはがし、教  
 主釋尊を動かし奉つれば、ゆるがぬ草木やあるべき、さはがぬ水やあるべき。

(十二) 一月萬影

上に引證した聖判に、例せば「釋尊は天の一月、諸佛菩薩は萬水に浮べる影なり」とある如に、久遠の本佛は天月であつて、幾億無量の諸佛菩薩は池月である、天月の一輪には、萬影の池月を攝めて居る、天月を忘れて池月を眺めるものは愚人である、釋迦本佛を忘れて、藥師大日或は彌陀を信するものは、本末顛倒の痴人である、曾て天台大師は、

天月を識らず、但池月を觀ず、  
 と喝破されたが、誠に至言である。

元來、藥師如來といふも、大日如來といふも、阿彌陀如來といふも、一つ久遠本佛の御徳を、三つの方面より稱へ奉つたのに過ぎないのである、即ち、精神上に煩悶し懊惱してゐる多くの衆生を救濟する釋迦牟尼佛の濟度の方法は、恰も病者に醫師が、藥餌を與ふるが如き有様であつて、藥師の名が生れ、この世を憐み、悲觀に沈み、厭世に陥いつて居る衆生の爲には、權りに未來の慰藉として、西方極樂淨土の彌陀の慈

悲を説かれたので、大日如來といふのも、釋迦牟尼佛の智慧は、日輪の闇黒を照破するが如く、幾多の衆生の迷霧を霽らす徳があるので、大日の名稱を得るに至つたのである、實際、これ等の佛は有名無實であつて、本佛化導の徳に名付けた名前に過ぎないのである、斯くの如く、壽量統一の佛陀觀を信解して、如來一代の經々を大觀するならば、信仰の歸趣に、一點の疑惑、迷妄を挿さむ餘地もあるまい。

佛教各宗の本尊に、釋迦牟尼佛を輕しめて、實體もない諸佛如來を重んずるに至つたのは、誠に感笑に堪へぬ次第である、試みに各宗の祖師達が、暫く私見を措いて、直接釋迦牟尼一代の教別に就き、佛陀觀を確立するならば、全藏全體は、釋迦牟尼中心ではないか、華嚴の盧舍那佛、阿含の現身佛、方等部の中に於ても維摩經・方積經等の大部分の經典の佛陀、般若部の法身佛、涅槃經の教主等、何れも皆釋迦牟尼中心である、僅かに方等部の中の、阿彌陀經・藥師經・動不經・地藏經などに、釋迦牟尼以外の餘佛や、色々な菩薩を中心に説かれたものがあるが、これ等は所謂、一機一

縁の小事であつて佛教の本旨ではない、世に法華經を信じ、日蓮主義を奉ずる人であつて、釋迦本佛の御名の下に歸依しながら、餘佛菩薩を雜亂勸請し、雜多の迷信にあるが如きは、壽量六或の法門に通ぜず、一月萬影の聖判を解せざる罪過であつて、破佛破法の大謗法である、斯くこの六或の法門を、反覆叮嚀に説明するのは、久遠本佛の果上の慈悲を語る大事な經文である事を、知らしめんとする老婆心である。

(十三) 六句の知見

凡そ壽量品以外の經には、先づ第一に、智慧を説き、次で慈悲、力用を説かるゝのが順序になつて居るやうであるが、本品は、慈悲力用の中には、智慧は自から具はつて居るものとして、慈悲を垂れ、應現を示した後、智慧を説かれて居る、固より智慧の大切な事は、いふ迄もないが、斯く智慧を後に説かせらるゝ所に、佛意の深重なものがあるので、上に述べ來たつた如く、壽量品は、曩に先づ如來の大慈悲を語られ

た、而して今茲に、如來の大智慧即ち「六句の知見」を説かせらるゝのである、その六句の知見とは、

一、如來は如實に、三界の相を知見す、生死の、若は退、若は出有ること無く、といふのが、六句の知見の第一句である、これは釋尊が、宇宙法界を如實に、お悟りなされた智慧をいふので、凡眼を以てこの三界を見るならば、遷滅無常、生死流轉であるが、佛眼を以て觀じ給へば、生死畢竟顯冥の差である、恰も波の浮沈と同様であつて、我等の本體には、無常變化はないものである、不滅である、久遠無始の大生命を持てるものであるといふのである。

二、亦在世、及び滅度の者無し、

これは第二句であつて限りある凡眼で見ることから、世に在ると見、又は滅すると見るのであるが、實には滅にもあらず、在にもあらず、常住である。

三、實に非ず虚に非ず、

第三句であつて、如來の知見は、現實に囚はれたり、又、現實を蔑しむなどの迷見を調和して、中道中庸を得たものである。

四、如に非ず異にあらず、

第四句であつて、如とは平等、異とは差別で、世間の差別にもあらず、出世間の平等にもあらず、如來は兩者を、雙用し相照し給ふて居られる。

五、三界の三界を見るが如くならず、

第五句であつて、我等は迷見を以て、この三界の相を見て居るのであるが、如來の三界達觀は、凡夫の迷見のやうなものではなく、その眞實をみそなはして居る。

六、斯くの如きの事、如來明らかに見て、錯謬あること無し、

第六句であつて、本佛は内證に、實智の力用を具へ給ふが故に、宇宙法界を照らし給ふて少しの錯謬もないものである。

要するにこの六句の知見は、如來の智慧の廣大を説き宣べられたものである、斯様



に如來の實智は、三界を徹見し給ふが故に、諸の衆生、種々の性、種々の欲、種々の行、種々の憶想あるを以ての故に、大慈悲の念止むことなく、我等の根性・欲望・諸行・妄想を觀察して、救濟し給はんとするのである。

〔十四〕 所作の佛事

所作の佛事、未だ曾て暫くも廢せず、の經文は、我等衆生にとりて、何んともいへぬ感謝の念に打たるゝ所である、本佛の慈悲は、千差萬別の衆生に應同して、諸の善根を生ぜしめんと欲して、若干の因縁、譬諭、言辭を以つて、種々に法を説く、

とあるから、一切衆生をして、大菩提を成ぜしめたいとの大慈悲は、手を變へ品を換へて、因縁で了らなければ譬諭、譬諭で解からなければ言辭を以て、教化し給ふのである、而して本佛が、我等衆生を愛感し給ふ御心は、暫くも息み給はず、只我等が、不孝にしてこの如來の大慈悲に、感激することが能きぬのであつて、一度この如來の大慈悲に、見覺め來たるならば、何人かそれに感泣せざらんや。

〔十五〕 果上の妙徳

斯く久遠の本佛が、我等衆生を救護し、愛念し給ふ大慈悲の佛意は、寸時も休まらぬので、無始久遠より、無終の永劫に互つて、常住不滅である、經に、是の如く、我れ成佛してより已來、甚だ大いに久遠なり、壽命無量阿僧祇劫なり、常住にして滅せず、とある、常住不滅の四文字は、壽命の常住、即ち慈悲教化の常住を語つて、過去現在未來に、限なき慈悲の應用を示すのである。

この久遠の古佛といふことが、よく世間にいふ天然の釋迦、自然の彌勒といったやうな意味であつたなら、佛教々理上、最も大切な因果の法則を滅劫する事となるから、この因果の法則を應用して、菩薩の道を修行し、久遠の壽命を得たことを明された、然しこれは、普通一般の因行の菩薩道を修めて、始めて果徳の本佛が出来上つたといふのではない。

諸の善男子、我れ本、菩薩の道を行じて成ぜし所の壽命、今猶未だ盡さず、復上の數に倍せり、

と仰せられた經文は、「果上の妙徳」といつて、本佛の妙徳を歎美されたのである。天台は「我本行菩薩道」の文を釋して、因行を擧げて果徳の常住に説き及んで居るが、これでは本佛が、因あつて果、因は始にして果は終、といふ普通の因果の法則に支配さるゝ事となつて、因果同時、又は、因果俱時、或は、本因本果といふ風の事が窺はれぬ、そこで日蓮上人は、この我本行の文は、本佛果上の妙用淨用を示すのであ

るとして更に一層深刻な妙判を垂れられた、この本佛果上の淨用とは、釋尊は、無始久遠常住の本佛であるが、九界の衆生を濟度せんが爲に、暫く因位の菩薩の修行をして見せしめられたのであつて、これは寧ろ無始の本佛の妙徳を、火揚されたものであるといふ事である。

(十六) 現滅の利益

この常住不滅の本佛の化導は、更に「現滅の利益」となつて現はれた、現滅の利益とは、壽量一品の中にあつて殊に重要な法門である、印度降誕の釋迦牟尼佛は、實に久遠無始の常住の本佛であつて、この金剛不壞、常住不滅の妙體である本佛が、衆生濟度の爲に、假に滅度を示し給ふことである、先哲は、

滅せざれば、損あり、

といふて居るが、如何にも佛意を巧妙、切實にいひ表はして居る、今一度平易にこの

現滅の利益てふ事を述ぶるならば、本佛は、説く可き事を説き終り、度す可きものを度し終り、應現の妙用、のこりなく示し終るならば、假りに入涅槃を示して、我等を利益し給ふものである、如來が常に世にましまして滅度し給はぬならば、我等衆生は如來に馴れて、善根を植えず、五欲——色聲香味觸の慾——の迷に沈み、憍り恣にして、倦怠を生じ、如來に對して遭ひ難きの想、恭敬の心を起さないから、我等を慈愍し、救護し、濟度せんとして、假りに滅度し給ふのである、經に云く、  
 然るに今、實の滅度に非ざれども、而も便ち、唱へて當に滅度を取るべしと言ふ、  
 如來、是の方便を以つて、衆生を教化す、所以は何ん、若し佛久しく世に住せば、薄徳の人は善根を植えず、貧窮下賤にして、五欲に著し、憶想妄見の網の中に入りなん、若し如來、常に在りて滅せざるを見れば、便ち憍恣の心を起し、厭怠を懷き、難遭の想、恭敬の心を生ずること能はじ、是の故に如來、方便を以て説く、比丘當に知るべし、諸佛の出世には、値遇すべきこと難し、

と、この現滅の尊き佛意を思ひ浮べたならば、我等の信仰の眼には、報恩と感謝の涙が流るゝであらう、この現滅の利益は、卑近な例ではあるが、恰も、大不孝者が、親の死に遇うて翻然と悔悟し、懺悔して不孝の大罪を詫び、本心に廻へるやうなものである。

過去に七佛の説があるのも、未來五十六億七千萬歳の後の世に、彌勒の出世を明かしたのも、偏に釋尊を渴仰せしめ、信仰せしめんが爲である、次で經には、  
 所以は何ん、諸の薄徳の人は、無量百千萬億劫を過ぎて、或は佛を見る有り、或は見ざる者あり、此の事を以ての故に、我れ是の言を作す、  
 諸の比丘、如來は見ることを得べきこと難しと、斯の衆生等、是の如き語を聞き、必ず當に難遭の想を生じ、心に戀慕を懷き、佛を渴仰して、便ち善根を植うべし、是の故に如來、實に滅せずと雖も、而も滅度すと言ふ、  
 と説かれて、本佛に遭ひ難き由を説き誠められた、薄徳の人とあるは、惡多くして善

少くなく、罪深くして福淺き人々である、斯る人は、長い年月を過しても、本佛を見奉つる人もあり、また見奉つることの能きぬものもあるもので、愈々、難遭の想を生じ、戀慕の念を起し、本佛を渴仰して信仰を勵み、諸の善根を植えやうと發心するに至るであらうから、本佛は實在不滅ではあるが、衆生救済の爲に、慈悲の至極として入滅を示されたのである、勿論、上の經文は、三世の利益を教へられたものである。又善男子、諸佛如來は、法皆是の如く、衆生を度せんが爲なれば、皆實にして空しからず、

と、この文は十方三世の諸佛出世し給ふとも、同一の化導をなし給ふものである所以を顯本せられたのである。

以上は壽量品の法説段であつて、これより下に釋迦牟尼佛、上の法説を「良醫治子の譬諭」を以て、説き示されるのである。

(十七) 良醫の譬諭

この良醫治子の譬諭は、法華七大譬諭の中の最後の譬諭であつて、本門にはこの一つがあるのみである、先づ譬諭の大略を述べ、次に經文に就いて大事な點を要解する事としやう。

或所に一人の良醫があつた、この醫者は普通でなく、智慧も深く、醫術に明るく、種々の藥を辨へ、如來なる難病をも治療する名醫であつた、而してこの醫者には澤山の子息があつた。

所が、この醫者が用務があつて、遠國へ旅立をした、すると、後に残つた子息達は、誤つて毒藥を飲んで悶へ苦しんで居つた、父の醫者が歸へり來つたのを見て、毒に中つて本心を失つたものも、失はざるものも共に喜んでいふやうには、我等は愚痴にして、誤つて毒藥を服しました、どうか解毒藥を與へられて、この瀕死のものを

救はれよ、と嘆願た。

父の醫者は、子息達の苦惱を見て、種々の薬法を用ひて、色と香と味との三つ揃つた薬を、搗蕪い和合して子息達に與へた、毒の激しく中つた子息達は服まなかつたが、中毒の少けなかつた子は、即座に服んで平癒つた。

所が毒氣深入の子は、色香よき味の薬を却けて服まないから、この子息等を憐愍の餘り、父はその良薬をこゝに留め置いて、又他國へ旅行された、而して中途より使を遣はし、子息等に告げて言はしめらるゝには、子等の父上は、旅行中に逝去された、と。

すると子息等は父の死を聞いて、大に泣き悲しみ、心遂に醒め、良薬を服して全治した、父はこの事を聞いて歸り來り、父子互に相みえて喜んだといふのである。

この譬諭は、如何にもよく壽量顯本の妙旨を説き現はして居る、次にこの譬諭を法門に合して、佛意の程を窺ふ事とする。

(六) 法論の合譬

この良醫治子の譬諭は、七大譬諭中最大の譬諭であつて、これが眞によく信解し了解するゝならば我等と如来との關係が、如何に迄有難く感ぜらるゝ事であらうか、今これより本文に入つて合譬を試みる。

▽譬へば良醫の智慧聰達にして、明らかに方薬に練し、善く衆病を治す、「良醫」とはいふ迄もなく、久遠實成の釋迦牟尼佛をいふのであつて、「智慧聰達」は佛の智慧の廣大をいひ、「方薬に練し」は方便力の勝れたるをいひ、「善く衆病を治す」は釋尊の救済力をいふのである。

▽其の人、諸の子息多し、若は十、二十、乃至百數なり、この多くの子息は、無量無數の我等衆生を譬へたのである。

▽事の縁有るを以つて、遠く餘國に至りぬ、

とは、釋迦牟尼佛が、大慈大悲の化導を他土の十方法界に垂れ給ふをいふのである。

▽諸子、後に佗の毒藥を飲む、藥發し、悶亂して地に宛轉す、これは我等衆生が、三毒煩惱——貪慾・瞋恚・愚痴——に蔽はれ、無明の酒に酔ふて、退大取小、迷本執迹とて、大乘法華の信仰を退いて小乘權經に移り、久遠の本佛を忘れて始成正覺の佛を崇めるが爲に、遂に六道を輪廻し、九界の生死の巷に彷徨するに至つた事である。

▽是の時に其の父、還り來りて家に歸りぬ、

とは、釋迦牟尼佛の今番出世、即ち印度に降誕ましまして我等衆生が、如來に値遇せる事である。

▽諸子毒を飲みて、或は本心を失へる、或は失はざる者あり、遙かに其の父を見て、皆大に歡喜し、拜跪して問訊すらく、善く安穩に歸へりたまへり、我等愚痴にして、誤りて毒藥を服せり、願くば救療せ

られて、更に壽命を賜へと、

「本心を失ふ」とは、全く法華を捨て本佛を忘れて、小乘權經に走り、權佛迹佛を信仰せる者で、日蓮上人が曰く、

本心と申すは、法華經を信する心なり、失ふと申すは、法華經の信心を引かへて、餘經へうつる心なり、

と仰せられた一句に分明である、「遙かに其の父を見る」とは、印度降誕の釋迦牟尼佛を、十五出家三十にして菩提樹下に成道せる始成正覺佛と思つて、戀佛の心はあるが、未だ久遠の本佛たる事を辨へざる程度の有様をいふので、「更に壽命を賜へ」とは、如來の説法教化を求め、不滅の生命を與へられん事を請ふのである、決して一生一期の壽命を賜へとはない。

▽父、子等の苦惱することは是の如くなるを見て、諸の經方に依りて、好き藥草の色香美味皆悉く具足せるを求めて、擣篋和合して、子に與へて服せしむ、而して是の言

を作さく、

此の大良薬は、色香美味、皆悉く具足せり、汝等服すべし、速かに苦惱を除きて、復衆の患無けん」と、

そこで良醫は、子息達の大苦惱を見て、一大良薬を作つて服せしめたのである、  
が「諸の經方」とは十二部經（一代の經典を説法の體裁よりして十二種類に別つ）  
の事であり「薬草」とは八萬四千の法門である、換言すれば釋迦牟尼佛一代五十餘年  
の經々説法の全體を指すのである、「色」「香」「味」とは、眞善美ともいふ可きで、八萬法  
藏十二部經の中より眞を盡し、善を盡し、美を盡して、擣き従ひ和合して作つた妙法  
蓮華經の五字の良薬を服せしめたのである、諸經は、色は善いけれども、香味よから  
ず、香は美いけれども、色味よからず、味は美いけれども、香色よからず、獨りこの  
妙法の五字は、色と香と味と具足せる大良薬である、斯く如來の大慈悲は、本心を失  
へる我等衆生をして、如何にもして救療せん」と、過去の利益限なきが如に、現在も未

來も共に利益し給ふのである。

▽其の諸子の中に、心を失はざるものは、此の良薬の色香、俱に好きを見て、即使之  
を服するに、病盡く除こり愈えぬ、

本心を失ふ迄に至らなかつた衆生、即ち深い迷妄に這入つて居なかつた者共は、法華  
一乘の大法を聞き、久遠實成の妙義を聞いて歸依信仰したから、大菩提を成すること  
を得た。

▽餘の心を失へる者は、其の父の來たれるを見て、亦歡喜し、問訊して病を治せんこ  
とを求索すと雖も、而も其の薬を與ふるに、肯て服せず、所以は何ん、毒氣深く入  
りて、本心を失へるが故に、此の好き色香ある薬に於いて、美からずと謂へり、父  
是の念を作さく、

此の子惑むべし、毒の中られて、心皆顛倒せり、我を見て、喜びて救療を求索すと  
雖も、是の如き好薬を肯へて服せず、

所が本心を失ふ迄に毒氣に中られた子達は、薬を服せずして、父の來たれるを見て、喜び病を治するやうにと求めるけれども、その與へた色香味の具足せる大良薬を服まない、何故かといふに、毒氣深く入つて本心を失ふて居るからである、思ふに如何なる大良薬も、服まなければ、病氣を全治することは能きない、今日の佛教研究者は、多くこの失に墮ちて居るのではなからうか、良薬を服するとは、信仰に這入ることである、この失本心の慙れなる者を慈愛し給ふて、如何にしたならば、この大良薬を服せしむることが能きやうかと、佛意思む時なく、茲に如來の方便設化が起るのである。

▽我れ今當に方便を設け、此の薬を服せしむべし、即ち是の言を作さく、  
 汝等當に知るべし、我今衰老して、死の時已に至りぬ、是の好き良薬を、今留めて此に在く、汝取りて服すべし、差えじと憂ふること勿れと、  
 是の教を作し已りて、復佗國に至りて、使を遣して還りて告ぐ、

汝が父已に死しぬと、

この文の如く如來は、方便を設け手段を用ひて、毒氣深入の子息達をして、正念正氣にして遣らねばならぬといふ意輪が動いて、我れ今齡老ひ衰へて死す可き時が近い、此の儘死してはこの病める子、惱めるものどもを如何にして救治す可きかと慈悲更に深重に加はり、茲に於て、「是の如き良薬を、今留めて此に在く」とあつて、如來一代の肝心たる教法王の妙法蓮華經を、我等滅後の衆生の爲に留めさせられたのである、然しこの儘では、尙ほも服薬すまいからと、入滅涅槃を假りに示し給ふた、即ち現滅の利益を垂れさせ給ふたのである、曩にもいつた如く、「世に住すれば損あり、滅を現すれば益あり」で如來がいつ迄も、この世にましましては、衆生は憍恣の心を生じ、厭意を起し、善根をなさず、放逸に着するから、常住不滅の本佛が、我等衆生の爲に入滅涅槃を示現さるゝに至つたのである、この涅槃の慈悲を感じ來るならば、我等はその鴻恩に感泣する、「遣使還告」とは、如來滅後の如來使を指すのであつて、



四依の大菩薩——人天の依止處となる四種の菩薩——である、今は正しく本化の弟子上行等の大菩薩を指すので、殊に上行の再誕日蓮上人その人である。

▽是の時に諸子、父背喪せりと聞きて、大に憂惱して是の念を作さく、

若し父在しなば、我等を慈愍して、能く救護せられまし、今者、我を捨て、遠く佗

國に喪りたまひぬ、自ら惟れば、孤露にして復恃怙なし、

常に悲感を懷きて、心遂に醒悟しぬ、乃ちこの薬の色香味美なるを知りて、即ち取

りて之を服するに、毒の病皆愈ゆ、

世の中に如何程不孝の子があつても、親の死を聞き、眼前に永き別れに遭遇したな

らば、如何なる人であつても、人の子として本心に廻へられずには居られない、壽

量品が、三世に互つて死の大法門を示された事は、洵に尊い譯柄で、父已に死しぬと

告げられた殺那、よし本心を失つて居たにもせよ、彼等に如何なる響を傳へたであら

うか、彼等は父の喪を聞いて大に驚き、父この世にましまさば、我等を慈愍み救護し

たまはんに、今は佗國にみまかり給ふて歸へり給はず、惟へば頼るべき父なく母な

く、心に悲觀を生じ、遂に醒悟して正氣に廻り、慈悲に裏まれた良薬を服して平愈した

やうに、我等衆生は、如來の入滅涅槃の悲しみに、漸く戀佛の心に廻へつて、妙法の

五字の良薬を服し、無明の煩惱の苦惱を治して、菩提の彼岸に到達することが能き

のである、そこで、

▽其の父、子悉く已に差ゆることを得つと聞きて、尋いで便ち來り歸りて、咸く之に

見えしめんが如し、

とあつて、楽しい父子の再會があるやうに、我等の信心が成就して菩提の覺月を眺む

る時に、本佛釋迦牟尼は、大慈の御姿を我等に示めし給ふのである、いふ迄もなく久

遠の本佛は、世々番々に我等衆生に應化を垂れさせられて、法華修行の人の所には、

天月の須臾に池水に影を浮ぶるが如く、尊い尊容を示現さるゝのである。

十九 譬諭の結釋

以上を以て合譬は終つて、經文はこれよりその結釋である。

▽諸の善男子、意に於いて云何、頗人の、能く此の良醫の虚妄の罪を説く有らんや、

否や、

否なり世尊、

とあつて、釋尊は、狂子を救はんが爲に他國に往いて死去したといふ悲報をもたらし  
たので、子息等は此の悲報に驚いたが爲に、良藥を服んで平癒したのであるが、この  
虚報をなした父の良醫に罪があるであらうか、どうかと問はれたので、一會の大衆  
は、これに答へて、どうして罪などがありませう、決して罪などはありませぬ、こ  
れこそ親の慈悲の極致であると白し上げた、時に、

▽佛の言はく、

我も亦是の如し、成佛してより已來、無量無邊百千萬億那由佗阿僧祇劫なり、衆生  
の爲の故に、方便力を以つて當に滅度すべしと言ふ、亦能く法の如く、我が虚妄の過  
を説く者有ること無けん、

と仰せられた、久遠の本佛は、成佛してより數限りなき年代を経て、勿論無始常住で  
生滅はない、けれども衆生の爲に方便力を以て、涅槃するのである、丁度良醫の父が  
死せざるに、死の悲報を致したと同様で、この方便涅槃がなかつたならば、我等衆生  
は、大良藥たる妙法蓮華經を信唱する事をしないから、久遠實成の釋迦本佛は、常住  
不滅であるけれども、生にあらずして生を示し、滅に非ずして滅を現せられたのであ  
る、この利益は、三世窮りなき大慈悲の應用である。

この結文には、無量の佛意があつて、過去、現在、未來の利益を示されて、虚妄な  
きを宜へ給ふたのである、壽量一品の大事は、久遠實成の大人格者が、この世に出現  
せさせ給ふたことを説かせられたのである、上來、壽量品の長行の大體を要解し

だが、不備にして思ひ達せざる所があるから、更に偈文の全體を順次に掲げて、逐次説明して補ふ事とする。

【註】日蓮上人の教義の中心である「三秘」の依文は、壽量品の中にある「色」「香」「味」の文である、三秘とは三大秘法の略で、一に本門の本尊、二に本門の題目、三に本門の戒且である。今これを説明する前に、佛教の「戒」「定」「慧」の三學を、この色香味に配當するならば、色は戒に、香は定に、味は慧に當る、何故に色が戒に當るかといへば、戒とは防非止惡の義で、あらはに表にわかつてゐる身と口との惡を防ぐからである、香を定に配當するのは、定とは禪定の義で、心を一境に止め餘念なき所謂精神統一の姿であつて、恰も香が、惡嗅を除いて心を静め、一境に止めると同様な譯からである、味は慧とするのは、味は味識の意味で、甘酸鹹澁等を味ひ分けるものであるから、智慧が事に處し、法界の眞理を味識するに當つたのである、今、  
本門の本尊は、三學中の定であつて香に當り、  
本門の戒且は、戒であつて色に當り、  
本門の題目は、慧であつて味に當るのである。

### (三) 偈文の要解

如來一代五十年の教法の肝心は法華經、法華經の肝心は壽量品、壽量品の肝心は自我偈である。日蓮上人が、

夫れ法華經は、一代聖教の骨髓なり、自我偈は二十八品のたましひなり、三世諸佛は壽量品を命とし、十方の菩薩も自我偈を眼目とす、自我偈の功德をば私に申すべからず、次ぎ下に分別功德品に載せられたり——されば、十方世界の諸佛は、自我偈を師として佛にならせ給ふ、世界の人の父母の如し、  
と、斯様に叮重を極めて自我偈の大切な事を示されてある。  
壽量品は長行も有難い譯であるが、この自我偈は一入有難い偈文である、長行は説明的であるが、偈は全く一編の詩歌である、であるから信仰感情の上に移して、一層尊重の精神が生ずるであらう。

▽我れ佛を得てより來、經たる所の諸の劫數、  
無量百千萬、億載阿僧祇なり、

この經文は、長行と同様に先づ法説である、彌勒を首め一會の大衆は、久遠實成の本佛たる釋尊を、印度に始めて降誕され、今始めて成道した佛であると思ふて居るが、決して左様な若々しい佛ではない、實には久遠塵點の古昔、成佛して今日衆生濟度の爲に、迹をこの土に垂現したのであると宜べ給ふて、執迹の迷情を破し、始成の迷見なる由を明し給ふたのである。

▽常に法を説きて、無數億の衆生を教化して、

佛道に入らしむ、それより來無量劫なり、

この經文は、久遠本佛の化導は、遠く距つた安養淨土にも非ず、眼に見えざる淨瑠璃世界にも非ず、白雲のその如き密嚴淨土にも非ず、實に我等衆生の居住せるこの娑婆世界に在つて、人々を救濟し、愛感し、化導されつゝある事を明かにしたので、「常説法教化」の文は、人格實在の活動を明らかに示し給ふたのである、然るに或宗旨の如に、岸打つ波の音、是れ法身常住の説法だなど、悟り氣に嘯いて、高く「我有

大乘」を氣取つて居るが如き微温い信仰で、どうして成佛の大事を成就する事が能きやうか、理談よりは事談が強い、壽量品が一代經中に超勝して居るのも全般を通じて、如來が我等衆生を應化救濟せられた一大事實であるからである、この經が一代經中になかつたならば、教千の教法、幾萬の法門も、根なし草の波の上に在ると同じである、佛教が理談であると觀た間は、眞の信仰に入ることとは能きない。

▽衆生を度せんが爲の故に、方便して涅槃を現す、  
而も實には滅度せず、常に此に住して法を説く、

我れ常に此に住すれども、諸の神通力を以て、  
顛倒の衆生をして、近しと雖も而も見えざらしむ、

この經文は、衆生の爲の故に、常住實在の久遠本佛が、迷惑せる我等衆生に、假りに生死を示されたのである、本體より觀、實體より信じたならば、生死無常を離れ給ふたる常住久遠の本佛である、例としては整はざるものであるけれども、孝養の心の

深き人程、父母に死に別れてもこの世に在すが如く感じ、いざといふ時には、過ぎ去り給ふた嚴格なる父、慈愛にとめる母の面影を思ひ浮べるが、不孝の子は目前に親を控へてをき乍から、それを忘れ親の恩を無みするものである、それと同様に、涅槃し給へる佛陀も、我等の信仰の眼には、不滅の如來を拜し奉つる事が能ざる、釋の中に「於ニ信心中ニ得見三寶」とあつて、本地常住の三如來を見奉つる事の能ざるのは、眞の入信の時である、日蓮上人曰く、

佛の入滅は、既に二千餘年を経たり、然りと雖、法華經を信する者の許に、佛の聲を留めて、時々刻々念々に、我れ死せざる由を聞かしめ給ふ、

と、法華經を信する者は、常に經典を讀誦し、題目を口唱するにつけても、久遠本佛の微妙なる音聲を聞き奉つるのである、如來が常にこの世に在しますとのみ思ふて居ては、大菩提心を起すに至らず、大善根を成するに至らず、遂に煩惱の雲に蔽はれ、眞如の覺月を眺むることの出来ない我等衆生の爲に、如來はこの娑婆世界に住し給ふ

て、不斷の説法、不休の救護を垂れ給ふて居るけれども、假りに入滅を示現し給ふので、これが大慈悲の至極である。

「我常住ニ於此」とは、明らかにこの娑婆世界にまします事を示さるので、この近い所にまします如來を、何故に見奉つる事が能きないのであらうか、いふ迄もなく我等は四轉八倒の迷見といつて、美を美、醜を醜、と見ることが能きないので、恰も盲目の日月を見ないが如きものである、目前にましますも無明煩惱の迷雲に遮られて、見奉り得ぬのである。

▽衆は我が滅度を見て、廣く舍利を供養し、咸く皆戀慕を懷いて、渴仰の心を生ず、衆生既に信伏し、質直にして意柔軟に、一心に佛を見たてまつらんと欲して、自ら身命を惜まず、時に我れ及び衆僧、俱に靈鷲山に出ず、

この十句の經文は、戀佛の至念、追慕の眞情を誘發されたのである、如來暫し涅槃し給ひ、化を餘所に移し給ふに至らば、必ず戀佛の眞心は、舍利供養となつて顯らるゝのである、舍利とは、釋迦牟尼佛の御遺骨をいふのであるが、その舍利の意味には、色身の舍利と法身の舍利との二つがある、色身の舍利とは、佛陀の肉身の遺骨であり、法身の舍利とは、佛陀の説法の遺經である、唯色身の舍利のみを尊重して、法身の舍利を輕んずるが如き事は、却つて佛意に悖るものである、迹門法師品には、この法華經の中に如來の全身をますとまで、釋尊自から宣べさせられてあるのであるから、眞の舍利供養は、法華經を信仰する事にあるのである、この舍利供養より聽ては、本佛實生の信仰に到達するのである。

「一心に佛を見たてまつらんと欲して、自ら身命を惜まず」と、内に雜辭の心を除き、外に精進の心を進めて「不三自惜三身命」の信仰に這入るならば、色相莊嚴の久遠本佛を見奉つる事が能きるのである、見神説、見佛説は隨分喧ましい問題ではある

が、佛敎にては「眼見」は誤りに墮ち易く「聞見」は多く正しいものとして、説かれ居る、涅槃經にはこの事を大に力説せられてある、聞見とは、道理を聽き、敎法を聞き、正しい信仰に入つて本佛を見奉つる事をいふのである。

この見佛の妙境に進まんに、身口意三業の信行を不惜身命の域に置かなくては、到底も到達することはできないので、この大信仰に到達するならば「時に我れ及び衆僧、俱に靈鷲山に出づ」と仰せられた、天台大師は「靈山一會、儼然未散」と、自己の見佛を語られた、迷凡の我等の肉眼と雖も、一點の如來眼を點するに至つたならば必ずこの境地に到る事が能きである。

要するに、本門壽量の經旨を堅く信じ、深く行じ、久遠本佛にま見え奉らん事が大事である。

▽我れ時に衆生に語る、常に此に在つて滅せず、  
方便力を以ての故に、滅不滅ありと現す、

餘國に衆生の、恭敬し信樂するもの有らば、

我れ復彼の中に於いて、爲に無上の法を説く、

汝等此を聞かずして、但我れ滅度すと謂へり、

この經文は、如來の常住不滅、不斷説法を示されたのである、法華一部の經典が、諸經に超勝し、卓越して居る所以は、當に教相文字の問題のみではない、不滅常住の久遠本佛の大慈悲の現はれであるからである、本佛常住の本體は、三世常住不滅であるけれども、本佛不思議の本神通力は、我等衆生を教化し、救護せんが爲に、滅に非ざるに滅を示し給ふのである、然るに釋迦牟尼佛の入涅槃を見て、迷ふて死と悟り、滅と思ふて、實體のない藥師や大日や彌陀に憧憬するのは、全く本佛現滅の眞意義を了解しない失である、曩に度々語つた如に、如來が久しくこの世に在しますならば、我等衆生は、善根をなさず、菩提心を起さず、戀佛の心を生じないで、五慾に着し、惡道の中に墮つるからであつて、これを救濟し給はんが爲の涅槃示現である、斯様に、

釋迦牟尼佛は、我等の住せるこの娑婆世界に在して不滅常住であるけれども、大慈悲の餘り、方便力を以て、滅不滅ありと示され、餘處の衆生が如來を戀慕し、大法を求むるならば、その國に應化を移し、説法化導し給ふのである。

▽我れ諸の衆生を見るに、苦海に没在せり、

故に爲に身を現せずして、其をして渴仰を生ぜしむ、

其の心の戀慕するに因りて、乃ち出で、爲に法を説く、

この經文は、如來は、生死の苦海に沈淪せる我等衆生に、戀佛の心を生ぜしめんが爲に、涅槃を示し、我等が渴仰するならば、直ちに教を説き給ふ大慈悲を語らるゝのである、更に詳説するならば、本佛如來の大慈悲の意輪は、寸刻の間斷なく、我等衆生の機根を照知し、觀察し給ふて、毫末も誤りなく、苦海に没在せる我等衆生の爲に、容易くこの世に應現しては、却つて渴仰の心が薄らぐが故に、戀慕の念、渴仰の念、内に充ち外に現らるゝ時に、如來の大法雨、大口輪が轉ぜらるゝのである。

思ふに我等は、時々刻々に襲ひ來る生・老・病・死・愛別難苦・怨憎會苦・求不得苦・五陰盛苦——上の四つを四苦、一切を八苦といふ——の苦惱は、大洋の濤々たる千波萬波の打寄するその如に、重ね重ねて止まぬこの苦海に沈溺して居る我等が、涅槃果上の彼岸に到らんには、念々作々に、本佛を渴仰し、慈念に接觸しなければならぬ。

▽神通力是の如し、阿僧祇劫に於いて、常に靈鷲山、及び餘の諸の住處に在り、衆生劫盡きて、大火に焼かるゝと見る時も、

我が此の土は安穩にして、天人常に充滿せり、園林諸の堂閣、種々の寶をもつて莊嚴し、寶樹華果多くして、衆生の遊樂する所なり、諸天天鼓を撃うちて、常に諸の伎樂を作し、曼陀羅華を雨して、佛及び大衆に散す、

この經文は、自我偈中に於ても殊に肝文であつて、「本國土妙」を説き表はしたものである。

凡そ宗教上の至難の問題は、國土論である、法華經の國土論よりすれば、我等の住んで居るこの國土を以て、罪の土なり、穢の國なり、迷の世界なり、塵の住處なりと蔑んで、この國土の外に遠く隔て、淨土を欣求し、樂土を憧憬するのは、大なる誤である、我等の住居せるこの土が、即ち娑婆即寂光の極樂淨土であるのである、三災四劫といつて、火・水・風の三災、成・住・壞・空の四劫、貧・瞋・痴の三災、治・亂・盛・衰の四劫、寒・熱・濕の三災、春・夏・秋・冬の四劫等の變遷があるといつても、娑婆國土の實體は、三災を離れ、四劫の外にある淨土である、我等の迷妄のみに由り、惡業の力に隔てられて、穢惡の土と見るのである、餘經は、種々の名の下に淨土を説いて統一がないが、法華經は、國土の中心を明し、この娑婆即寂光の本國土妙に一切を統歸し、十方に説かれた淨土を開顯してたのである、日蓮上人が、



しかるに我日本國は一閻浮提——全世界——の内、月氏漢土にもすぐれ、八萬の國にも越へたる國ぞかし、

と仰せられた愛國の大精神も、

汝早く信仰の寸心を改めて速かに實乗の一善に歸せよ、然れば即ち三界は皆佛國なり、佛國其れ衰えんや、十方は悉く寶土なり、寶土何ぞ壞れんや、國に衰微なく土に破壞なくんば、身は是れ安全にして心はこれ禪定ならん、

と、立正安國を師々吼せられたのも、娑婆即寂光の國土觀が大なる力となつたのである、故に上人は、

今本時の娑婆世界は、三災を離れ、四劫を出でたる常住の淨土なり、

と國土常住論を確立された、この經文に因る時には、爾前四十餘年の間、穢土なりと排斥されて居たこの娑婆こそ眞の淨土で、十方に説かれた淨土は一切影像であり、幻影であり、迹土であり、無常の土であるのである、斯くの如くにして、若し依報た

る國土が、常住でなかつたならば、正報たる我等衆生が成佛の曉に、圓底方蓋といふ可きではないか。

この娑婆國土の本體は、常に常住の淨土であつて、經に「天人常充滿」と説いて果上の化作を示し、「園林諸堂閣」とて、國土嚴淨の美を宣べさせられ、餘蘊なく我等の信仰の欲求を満たされて居る、然るに我等は、斯る尊い常住の淨土に住し乍ら、罪業の火焰に我と我が身を焼き煩惱の濁水に我れと我が身を汚して、「寶樹多華果、衆生所遊樂」の法悦を喜び、「諸天擊天鼓」の妙音をも聞くことができないのである。

▽我が淨土は毀れざるに、而も衆は焼け盡きて、

憂怖諸の苦惱、是の如き悉く充滿せりと見る、

是の諸の罪の衆生は、惡業の因縁を以つて、

阿僧祇劫を過れども、三寶の名を聞かず、

この經文は、我等の罪業の因縁に因て、三寶に値遇し得ざるを示されたものであつ

て、我等は煩惱深重なるが故に、常住の淨土に住みながら穢惡充滿の土と思ひ、不滅常住の久遠の本佛を、遷滅無常と迷惑するに至つたのである、國土の本體には、二様のある譯はないのであるが、我等の罪業の招き寄せた結果が、眞の淨土であるこの娑婆國土を、穢惡の土と観じるのであるが、久遠の本佛の居所としてのこの娑婆世界は、實は三世に不滅、十方の中心淨土である、恰も、善良なる人には到る處に、樂土があり、邪惡の人には到る處に苦土がつき廻るやうに、我等が穢と見たこの土の外に、如來の極樂淨土があるのでない、我が如來の娑婆即寂光の淨土は毀れざるに、而も迷へる衆生には燒け盡きて憂怖苦惱の充てる、三災四劫の穢土と見らるゝのである、と教へられたのである、斯る迷妄の衆生は、又、その惡業の因縁に依つて、多劫を経て三寶を見奉つることを得ぬ、と經には示されてある、不見三寶の因縁は罪業深重であつて、我等は一切の罪惡よりのがれて、是非共得見三寶の善因縁を結ばなければならぬが、その得見三寶の大因縁は、壽量品に顯はれたる久遠の本佛に歸依

し奉る事である事を忘れてはならぬ。

【註】三寶とは、一に佛寶、二に法寶、三に僧寶である、三寶にも種類があつて、一體三寶、別體三寶、住持の三寶等の事があるが、其等の説明は措いて、茲にいふ三寶とは、佛寶は久遠の本佛釋迦牟尼如來、法寶は久遠の本法妙法蓮華經、僧寶は久遠の本化上行菩薩である、今これを壽量品の經文に求むれば、譬如眞寶は本佛釋迦如來であつて佛寶、是好良藥は本法妙法蓮華經であつて法寶、遣使還告は本化上行菩薩であつて僧寶である。

凡そ釋迦教徒と外道教徒との分岐る所以は、區々たる相違は別として、三寶に歸依するは佛教徒、然らざるものは外道である、法華經の結經に「我れ今大乘經典甚深の妙義に依つて、佛に歸依し、法に歸依し、僧に歸依すと、是の如く三たび説け」と明らかに佛教徒の資格が示されてある、この歸依三寶は、佛教信仰の第一信條であつて、三寶の内容に相違があつても、始め小乘より終り大乘法華に至る迄、この信仰形式の第一信條に異りはない、之を我國の佛教歴史の最初に證明しても、佛教渡來の時に三寶を貢獻した事、次で聖德太子の篤教三寶にも、明確にこの信條が示されてゐる、然るに我國の現在の各宗派が、佛寶を奉安しても法・僧を忘れ、法寶を尊重しても佛・僧を忘れ、僧寶を大切にしても、法・佛を忘れて居るか如きは、誤りの大なるものである、必ず我等の信仰は、三寶具足の信仰でなくば、正義正統のもてない。

▽諸の有ゆる功德を修し、柔和質直なる者は、

則ち皆我が身、此に在りて法を説くと見る、  
 或時は此の衆の爲に、佛壽無量なりと説く、  
 久しくして乃し佛を見たてまつる者には、爲に佛には値ひ難しと説く、  
 我が智力是の如し、慧光照すこと無量にして、  
 壽命無數劫なり、久しく業を修して得る所なり、

この經文は、得見三寶の因縁を説かれたものである、常住不滅の本佛を、遷滅無常の佛と思つてゐた迷見を去つて、これ迄の罪業を悔悟し、愈々、進んで善根を植え功徳を修し、心質直なる者は、久遠の本佛を見たてまつり、此の土に於て梵音の説法を聞くことを得るに至るのである、或時はこの衆の爲に、如來の佛壽は極りなく長く、常住不滅のものであるとも説く、又、佛の在世に遇つて、佛にはいと易く値ふことのできるものと思つて居る者には、中々値ひ難き由を教へもするもので、我が神通力は是の如きものであるぞよ、如來の智慧の光明は無量であり、無數劫に至るも不滅であ

る、斯る智慧斯る壽命は、久しく因縁を修行して得る所である、然しこれは久修に寄せて久壽を語るものであつて、この因の修行を語るからとて、始覺の佛なりと思つてはならぬ、暫らく本因に寄せて、果徳の廣大を歎美するものであつて、壽量品の本佛は、始めなき始よりの覺者である。

▽汝等智有らん者、此に於て疑を生ずること勿れ、  
 當に斷じて永く盡さしむべし、佛語は實にして虚しからず、

この經文は、如來の佛語の不虛を結する文であつて、智者とは如來智を信する者は即ち智者である、故に執近執迹の迷情を去つて、久遠常住の本佛に歸命するならば、如來の佛智に同化するものであるから、我等も亦信を以て慧に代へた智者である、日蓮上人曰く、

夫れ佛道に入る根本は信を以て本となす——設ひ悟りなくとも、信心あらん者は鈍根も正見なり、設ひ悟りありとも、信心なからん者は、誹謗闡提の者なり、

と、我等は、如來一代の設化、無量の教法は眞實不虛のものであるから、本佛實在の大神通力に對して、寸毫の疑念もなく、自からその疑惑を斷つて、至心の信仰に這入らなければならぬ。

▽醫の善き方便を以つて、狂子を治せんが爲の故に、實にはあれども而も死すと言ふに、能く虚妄を説くものなきが如く、

この經文は、長行の良醫の譬諭に詳述したやうに、良醫がどうかして憐む可き狂子に、一つの驚を與へんとて、殊更に他國に行き、死の報を傳へしめて、彼の狂子等の精神上に、強き苦痛と大なる驚愕とを與へて、本心の人、正氣のものにしたのであるが、この良醫の善好なる設化は、單なる虚妄と見る可きものであらうか、決して左様なものではなからうと説いて、如來が衆生を救濟さるゝ上の方便設化の不虛を、示さんとするのである。

▽我も亦爲世の父、諸の苦患を救ふ者なり、

凡夫の顛倒せるを爲て、實にはあれども而も滅すと言ふ、

常に我を見るを以ての故に、而も憍恣の心を生じ、放逸にして五欲に著し、惡道の中に隨ちなん、

我れ常に衆生の、道を行じ道を行ぜざるを知つて、應に度すべき所に隨ひて、爲に種々の法を説く、

この經文は、感應の本源を明し、救護の基礎を示し、我等の信仰の歸着點を顯はし給ふたのである。

信仰意識の上に、本佛救主が父として深く感ぜられなくつては、活ける信仰は生まるゝものでない、恰も幼童の慈母に、抱き合されたるが如き實感を得なくつては、眞の信仰は見られぬものである、この意味が「我も亦世の父」と示されたので、その親しき我等衆生の父は、衆生の總ての苦み、諸の患を救はるので、「諸の苦患を救ふ者なり」との文字は信仰の上に在つて、此上もなき有難い經文である、壽量本佛の父

の救の力は限りがない、それを限りあり、窮りありと思ふから、本尊を誤り、信仰を亂すのである。

我等凡夫は、顛倒の迷見に在るが故に、實在の本佛を入滅されたものと思ふが、然し又、如來は久しく世に在ますものと考へて馴れるならば、憍恣の心を生じ、放逸にして五欲に著し、惡道の中に陥り、永劫の苦に沈淪するであらうから、如來は、それを常恒不斷、晝夜の分ちなく、道を行するものと行ぜざるものを了達して、隨逐の化導息む時なく、化度す可きに隨應して種々の法を説かせられた、隨逐の化とは、母の愛子を念ふの情と同様に、幼童の走り行く時と處とに、寸時も離れ給はぬといふ意味の慈悲である。

思ふに、一代經々の多きも、八萬法藏の廣きも、佛陀の實在を説き隠し、本佛の常護を覆ふならば、眞に天に日月なく、人に魂がない如なものである、この實在と常護とを顯示されたものが、即ち壽量品である、されば法に違ひ、佛に背く不孝不信の狂

子を覺醒せしめんとして、善巧の方便、救護の慈化は起つたのである。

▽毎に自らは是の念を作さく、何を以つてか衆生をして、無上道に入り、速かに佛身を成就することを得しめんと、

この四句の經文は、本佛大慈悲の結晶である、壽量一品の肝文であり、一代設化の神髓である、法華一經の信仰は、この處より發するのである、信仰の一步一步が進むにつれて、本佛大慈大悲の本願に、感泣せずにはゐられない、昔、この偈文を讀誦する毎に、感泣嗚咽して語塞り、聲を絶せられた彼の明惠上人の如き、元政上人の如きを思ひ浮べ、又、三百年の往時、『法華大意』を著述した日遠上人が、佛教と基督教との勝劣淺深の判決を定められたのも斯の文である、先哲は「我が釋尊、我が爲めに説き給ふ大慈大悲の南無妙法蓮華經」といふ意味を述べられて居る、予の如きものが、文字にして文字に非ざる、本佛本願の大慈悲を要解せんとするのは、恐懼の念に堪へぬが、九牛の一毛の心地に住して、次に述ぶるのである。

先づ文に就いて見るならば「毎」とは不斷常住の義であつて、本佛の大慈悲の三世に互つて、暫くも息ませ給はざるさまである。「自」とは如來御自身の事であつて、法報應三身即一身の應身事常住の釋迦牟尼佛の事である。「作」とは大慈の念願發して、衆生の教化救済利益の作用を示すことである。「是念」とは衆生憐愍の大慈大悲の念願で、即ち本佛の意輪である。「以何」とは慈悲の意輪發して形聲の二益となり、形聲としては、種々に身を應同し、無量無數の身を垂迹し、諸佛菩薩諸天善神を攝盡せる本佛の身輪であり聲益としては、無量の說法、無數の教法と成つて、八萬四千の經法及び世間の有ゆる善論を統一せる本佛の口輪である。「衆生」とは我等の事であつて、千差萬別に機根は相違して居るけれども一も餘さず、ありとしあらゆる衆生を包含して居るのである。「得入」とは法華受持の信仰決定することであつて、入は歸依、渴仰南無の義である。「無上道」とは法華本門の大道である。「速」とは速疾の義で、漸々迂回行でなくして即身成佛の意である。「佛身」とは、色相莊嚴の妙覺極果の妙體であ

る。「成就」とは轉凡成聖であつて、成佛の果滿をいふのである。以上を以て、壽量品は講了したが、全く要點の要解であつて、足らざる所は多くあるが、分別功德品以下に於いて、その満たざる所をば補ふ事とする。

### 分別功德品第十七

#### 〔一〕 本品の生起

久遠の釋迦牟尼佛の壽命の長遠なる事を、三輪の妙化を以て、説き示されたのが壽量品である、この久遠本佛の佛壽長遠の顯示は、壽量一品の主眼であり、法華經一經の精神であり、大藏全體の肝心である、此の本佛の壽命長遠の大法門を、聽聞した靈山一會の大衆に對し、聞法の功德を一々に擧げ、更に現在の爲に四信を説かせられ、滅後の爲に五品を明かし給ひ、現當の兩益を與へ給はんが爲に、本品があるので

ある。

### 〔二〕 題名の解釋

「分別功德品」と題した譯は、前品に佛壽の長遠を聞いた一會の大衆は、歡喜し、得益を被つたが、この佛壽長遠を信解し、渴仰する人々の、佛在世に於ける又滅後に於ける、功德の程を種々に分別して、其の次第淺深を定めさせられるので、分別功德品の題名があるのである、而してその功德を分別し給ふに當り、經文を窺ひ奉るならば、一念信解といひ、一念隨喜といひ、共に最微弱なる信念に、廣大な功德を説かせられて居るが、誠に無窮なる佛意の程を感じる次第である。

### 〔三〕 功德の分別

我等が法華經に歸依し、渴仰して信行を勵むには、その利益の廣大無邊なることを

的確に、信解してこそ、不退轉の信仰を成するものである。

爾の時に大會、佛の壽命の劫數長遠なること、是の如くなるを説きたまふを聞き、て、無量無邊阿僧祇の衆生大饒益を得つ、

と先づ釋尊は、彌勒菩薩に本門の得益を明された、爾前四十餘年及び迹門の菩薩も、壽量品を聞く時、始めて眞に斷迷開悟し、三界を出離し得るのであると告げ給ふた、日蓮上人が、

眞實の斷惑は、壽量の一品を聞く時なり、

と仰せられたのは、正しくこの意である、そして經文には、十二の得益を擧げて一々に授記せられて居るが、これには、色々法數的な説明を要する事であるから、初歩の研究には、反つて繁雜の嫌があるので、詳細な説明は、差し控へて措く事にする。

然し經文に就て、本門の授記を研究する、人に、一言して置く可き事がある、其は、既に迹門に於いて、上中下根の衆生に、悉く成佛の授記があつて、而も一見するなら

ば迹門の授記の方が、却つて本門のそれよりも、一層有り難味を覺ゆる事である、だがそれは、大なる間違であつて、迹門の授記は、自己の當體に、本有の佛知見が存在して居る事を知らないで居た二乘に、四佛知見を知らしたもので、未來に成佛せんことを證言されたものである、謂は、成佛の暗示である、然るに本門に到つて、壽量の佛壽長遠を聽聞した靈山一會の大衆は、一切が皆菩薩である、自己の當體に本有の佛性の存在する事を確認せるのみならず、更に一步を進めて、佛性活現の道に這入つて居るのであつて、佛壽長遠は、應て自己の生命の久遠無始である事を體達して、その不滅の生命を現前に活躍せしめんとして居るのである、であるから、本門の授記は、直ちに成佛の理を、事實に證明するものであつて、迹門の授記の理的なるに反し、これは事理的である、而して彼は哲學的であり、これは宗教的である、彼は智であり、これは力である、更に換言すれば、彼は成佛の理論であり、これは成佛の事實である、これを日蓮上人は、前に引證した如うに、眞實の斷惑は云々と、仰せられたのである。

〔四〕 時衆の供養

斯くも壽量開法の功德の廣大無邊なるに、諸天は雨香、天鼓、雨衣、瓔珞、燒香、旛蓋、歌讚等を以て、釋迦牟尼佛、多寶佛其他の諸佛菩薩竝に一會の大衆を、供養し讚歎した、これはこの奇瑞に托して、時衆が領解を表はしたのである、斯の如き供養讚歎が、授記の後にあるのは、迹門全品に未だ曾てあらざるの大事である。

法利を得る者を説きたまふを聞きて、歡喜身に充偏す、  
 とある經文を拜して、如何にも時衆歡喜の態が偲ばれる、そして、  
 多く饒益する所あること虚空の無邊なるが如し、  
 とあつて、利益の甚大なることが知るゝ、日蓮上人曰く、  
 法華經の功德は、虚空にも餘りぬべし。



此の時衆供養の「佛名聞十方、廣饒益衆生、一切具善根、以助無上心」までが、本門の正宗であるから、分別功德品は、前後の二段に分れて、前は正宗分、後は流通分に屬するのである。

〔五〕 現在の四信

今や經文は、正に本門流通段に移つて、いよく佛壽長遠聽聞の功德を、現在の「四信」と「滅後の五品」とに分つて、分別せらるゝのである、現在の四信とは、

一念信解 略解言趣 廣爲他說 深信觀成

の四つである。

一念信解とは、本經の文に、佛が彌勒菩薩に告げらるゝに、衆生あつて、佛の壽命の長遠なることを聞いて、よく一念信解をすならば、人あつて阿耨多羅三藐三菩提——佛道——の爲に、五波羅密の修行をして、其の修行の時期の長さ八十萬億那由

劫の間であつても、此の廣く長い修行を以てして、尙ほ一念信解の人の功德に及ばぬこと、

百分、千分、百千萬億分にして、其の一にも及ばず、乃至算數も譬論も知ること能はず、

とあつて、凡慮の及ばぬ程の大功德のある事を、佛自らが示し給ふて居られる。

【註】五波羅密を語つて見るならば、一には、檀波羅密であつて、これは、布施と譯し、修行の總てを盡し得た行であり、二には、尸羅波羅密といつて、持戒と譯し、五戒、八齋戒、十善戒、二百五十戒、五百戒、等、無量の戒のことである、三には、羼提波羅密であつて、忍辱と譯し、千難萬苦を忍び、總ゆる恥辱めを忍ぶ行をいふのである、四には、毗梨耶波羅密である、これは精進と譯し、佛道を行じ、萬善衆徳を勵み、毫も退轉なく、修行を増進することである、五には、禪波羅密であつて、靜慮と譯する、散亂亂動の心を除き、念を一境に住める事である、この五波羅密に、般若波羅密即ち智慧波羅密を加へて六波羅密といふ、詳しくは日蓮上人遺文諸願成就鈔參照

五波羅密行を一行たりとも、暫らくも行する者の功德の廣大なる事は、筆舌の及ば

ぬ處であることは、いふ迄もないが、その五波羅密行を整へて長き時間の間、行する功德よりも、一念信解の功德が、更に勝るとは、行淺功深の妙旨である。略解言趣とは、自己の信仰の意義が、少し明了になつて、唯一片の信仰のみではなくて、如來の金言の趣旨を、略、解了する程に、進んで來るのである。廣爲他說とは、略解言趣の人よりは、一段の信解が増して、廣く法華一部の法門、殊に如來の壽命の長遠なる由を、他人の爲に説教し、演説する事である。次に深信觀成とは、信解益々進み、智目明了になつて、釋尊は常にましますといふ觀念が、成就する義である、であるから、此の位にある人は、釋にもある如く、靈山一會儼然未散、の妙境を觀奉る事が能るのである。この四信の中の、一念信解の位に、我等が住するならば、末代法華の修行を成ずるものである、然るに法然上人一流の徒は、法華の教理は、如來一代に超勝せる最上の經典であるが、理義深遠にして難解の法、難行の經と、妄りに誤判して居るのは、法華

の經意を無する者、佛意に違ふの徒である、一念信解の文を解釋するに、天台日蓮の判釋があつて、相違する所はあるが、日蓮上人は「唯信無解」と判じられてある、即ち「解の一字は後——略解言趣——に奪はる」と、眞に千歲不磨の聖判である、解の字は、第二の略解言趣にゆづられた事は、經文にも顯はれてゐる、故に我等法華の行者を、佛壽の長遠を信仰し奉る最微最小の信仰に源を發し、正覺の大菩提を成就し、但信口唱の妙行、即ち唱題成佛を正意とすべきである。

日蓮上人立教開宗の旨致が、信行正意である事は、論なき所である、但信口唱の信行正意は、誠に末世當今の我等衆生に時機相應の妙行である、理解觀念の法行正意は、末法今時の行法としては、過時舊曆の難行であつて、像法時代の行法である、日蓮上人の信行が、本品の現在の四信の中の、一念信解の佛意と、滅後の五品の中の、初隨喜の經意に據り給ふた事は、我等の感孚す可き所で、是れ實に本化上首の上行菩薩に非ざれば、知見し能はざる法門である。

〔六〕 滅後の五品

今「滅後の五品」に就て、名義を擧げ、要解するならば、どれ程、我等法華本門の行者が得る功德の廣大であるか、解了せらるゝであらう、信行の宏範は、蓋し、このところに淵由するのである。

滅後の五品とは、

- 初隨喜品 讀誦經典第二品 更加說法第三品 兼行六度第四品 正行六度第五品

である、此の五品はどういふことであるか、

初隨喜品とは、經文に、

又復如來の滅後に、若是經を聞きて、毀譽せずして隨喜の心を起さん、當に知るべし、已に深信解の相と爲く、

とあつて、隨喜といふことは、如來の壽命の長遠なる法門道理を聞いて、嗚呼有り難し尊しと、合點して、喜び信する義である、であるから、隨は、久遠本佛の說法を信する意である、斯様に隨喜した行人は、まづ自らが喜び、他をも喜ばしむるに至る、これが法華本門の初心の行者である、この行人は「而不毀譽一起隨喜心」とあるから、いふまでなく危い行人であつて、毀譽せずとは、佛をそしめることをしない事であつて、佛壽の長遠を、やつと信するは信じられたが、ほんの初心の者である、日蓮上人は正しく、法華信仰、本門修行の大事を、此處に取り給ふたのである、更にこの初品の功德を廣説せられたのが、次品の隨喜功德品第十八の生起であつて。この隨喜の二大文字を、體得するならば、無上道に入る事ができるのである、日蓮上人は御聖判に示されて、

近來の學者一同の御存知に云く、在世滅後異なりと雖も、法華を修行するには、必ず三學を具す、一を缺ても成せず云云、予又年來此の義を存する處、一代聖教は且

らく之を置く、法華經に入て此の義を見聞するに、序正の二段は且らく之を置く、流通の一段末法の明鏡尤も依用と爲べし、而して流通に於て二あり、一には所謂迹門の中に法師等の五品、二には所謂本門の中の分別功德の半品より經を終るまで十一品半なり、此の十一品半と五品と合せて十六品半、此の中に、末法に入て、法華を修行する相貌分明なり、是れに尙事行かざれば、普賢經、涅槃經等を引き來りて、之を糾明せんに、其の隠れ無き歟、其中の分別功德品の四信と五品とは、法華を修行するの大要、在世滅後の龜鏡なり、荆棘の云く、一念信解とは卽是れ本門立行の初なり云々、其中に現在の四信の初の一念信解と、滅後の五品の第一の初隨喜と、此の二處は、一同に百界千如一念三千の寶篋、十方三世の諸佛の出門なり、この法門は、斯くの如く重要なるものである、尙詳細を盡すべきであるが、釋尊自らが、隨喜功德品を説し給ふて居らるゝのであるから、後に讓ることとする。次に讀誦經典第二品とは、法華經を讀誦するまでに、初隨喜より一段と進んだの

である、讀ては、經品を手にして讀むことである、誦とは、暗誦であつて、經意を味識し、行法は更に加はつて、經典研究もするのである。

次に更加説法第三品、これは、自行漸く成じ、化他の行に進んで、隨喜し、讀誦も成じ、他に向つて佛壽の長遠なる事を、説法し教化せんとする行位である。

次に兼行六度第四品、これは前の三品の修行に、二轉進を成し、隨喜、讀誦、説法の三品に、六度を兼ねて修行する行人である、換言せば、久遠實成の法門を信解し、聽て理行が事行と成り、正しく實行に入つたのである、さりながら全く、布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧の六度を修行するまでには到らず、未だ兼ね行する行位である、六度といふことは、菩薩此の修行に因りて、迷凡より悟聖の境界に度る故に、六度といふのである。

次に正行六度第五品とは、釋に、圓解稍熟して、理事融せんと欲す、事に涉れども理を妨げず、理に在りて事を隔て

す、故に具に六度を行す、

とあつて、正しく六度の行が、純然たる實行となつたのである。

此の五品は、自行化他に互るのであるが、別して後三品は化他行である、已上四信五品を略講したが、四信と五品は、名目異なるも、義に於いては異りはない、滅後には、讀誦經典が加はるので、五の數を爲すのである、此の四信五品を了解して、一念信解、初隨喜の功德の廣大無邊なる事が明らかになつたならば、此の經を信仰せずには居られないであらう、その行人の功德を、最後に釋尊自ら説き給ふて、佛子此の地に住すれば、則ち是れ佛、受用したもふ、常に其中在して、經行し若は坐臥したまはん、

と、是れ全く法華修行の人の居所は、本佛如來が、常護し給ふといふ、誠に有り難い經文である、受用とは領受取用の義で、本佛が、嘉納し加被し救護し給ふの經意である、故に我等法華修行の人の居る所には、本佛如來は、經行し坐臥を共にし給ふので

ある、斯様に朝夕、本佛と起居を共にして頂けることを、強く信じ得られたならば、人生の幸福これに過ぐるものはいなであらう、日蓮上人は、此の常護の有様を示し給ふて、

影と身と、水と魚と、聲とひびきと、月と光との如し、

と判じられて居る、思ふに法華經の信者となりながら、法悦の生活に入らず、不安の念にかられて、唱題しながら修行しながら、何等の信仰の光明が得られないのは、信仰に何等かの足らざる所があるからである、法華經の信仰には、隨喜が生れなくては、ほんものでない、行者各々が至誠に策勵して、得ざれば止まぬと、はげまなければならぬ、日蓮上人曰く、

南無妙法蓮華經と、心に信じぬれば、心を宿として釋迦佛懷まれ給ふ、始は、しらねども、漸く月重なれば、心の佛、夢に見る、悦こばしき心漸く出來し候べし、

と、法華經の信仰の出來上つたのは、隨喜の生活に入つた時である。

### 隨喜功德品第十八

#### 〔一〕 本品の生起

前の分別功德品に於て、滅後の五品の功德を説き給ふ中に、二三四五品の功德をば委細にこれを校量し、宣説せられたが、初隨喜のみに就ては、たゞ「深信解の相と名づく」と示され未だ何等の功德をも、説き給はなかつたから、こゝに於て、正に深重なる佛意のある可きを示さんとし、そこで彌勒菩薩が問者となり、この初隨喜の功德を問ひ奉つたので、釋尊は喜び給ふて、慇懃にその功德を説示されたのが本品である。

#### 〔二〕 題名の解釋

釋に  
隨とは、事に隨順するに、二なく別なく、喜はこれ己を喜び、人を喜ぶことにし、深奥の法を聞いて、理に順するに實の功德あり、事に順するに權の功德あり、己を慶ぶに智慧あり、人を慶ぶに慈悲あり、權實智斷合して、之を説く故に隨喜功德品と言ふ、

とある、この題各の釋意を更に明らかにする爲に、通俗にいふならば、「隨喜」とは、佛壽長遠の尊く有り難い譯柄を聞いて、教主釋尊の金言に隨ひ、成る程さうである、喜び信する位の、智慧領解の弱い人達の心の状態をいふのである、此の下根劣機の人達の隨喜せる功德を、説かれし品であるから、「隨喜功德品」と名付けられたのである。

本品を説かせ給ふ所以は、極めて深重なる佛意があるので、四信五品を分別し給ふも、詮する所は、下根下機最劣最小の行人を中心として、説かせ給はんが爲めである。

る、この易修淺行のものに、無上菩提の大利益があるのである、是れ所謂「高山の水は幽谷に下るの能あり、最勝の經は、劣機を濟ふの力あり」との意味で、又「行淺功深、以顯三經力」とは、この意義である。

〔三〕 隨喜の功德

他人の善行美事を見聞して、誠心誠意喜ぶ人は、尊き人であり、美しい人格の人である、我々は常に嫉妬憎惡の念を去つて、隨喜讚美の人、法說歡喜の人と成らなくては、法華信仰の人とはいはれぬ、日蓮上人は、「法華經はほむるによりて功德をます、と仰せられたが、いかにも感佩に堪へぬ次第で、我等は上人の聖意を、本品の經旨の中によく味識することが大事である。

こゝに彌勒菩薩が、

若善男子、善女人有りて、是の法華經を聞きたてまつりて、隨喜せん者は、幾所の

福をか得ん、

と問ひ奉つた、すると釋尊は、それに答へて五十展轉隨喜の功德を説かせられた、佛の滅後に、若し在家にても出家にても、老若男女を問はず、この經を聽聞し隨喜し、その法座を去つて、彼處此處へ宣傳し轉教し、甲より乙へ、乙より丙へ、丙より丁へ、といふ工合に、最初の人より次第々に、傳へ傳はつて、第五十人目まで展轉せん、この第五十人目の人は、更に教へを他へ傳へるだけの理解はなく、僅かに我心の内一念隨喜する位の人であるが、その第五十人目の人の功德を、釋尊は次の如に御説きなされたのである。

今經意をいふならば、人あつて、四百萬億阿僧祇の世界の六道、四生——卵生、胎生、濕生、化生——のありとしあらゆる、一切の衆生に、その欲する望みに任せて、金銀等の七珍萬寶、宮殿樓閣、飲食衣類等を飽き足るまで、施すこと一年ならず二年ならず、八十年に滿つるまで布施した、この財施の上に、更に法施を以て、これを導

いて、小乗の四向四果——羅漢の悟りの階級——の得果あらしめたとする、かゝる大施主の功德は、廣大無邊ではないか、この功德を以て前に挙げた第五十人目の人の、一念隨喜の功德に比べて見るならば、この功德は、かの功德の百千萬億分の一にも及ばぬ、第五十人目の人の功德すら、尙ほ斯くの如くであるから、最初の人の功德は、到底も思ひ慮られぬほどであると示された。

思ふに、佛教の信仰は、一念が誠に大事である、最初の一念を誤れば、智者學匠と雖も、墮地獄の因である、「一念の發心が迷悟の礎」であるとは、至言である、一步千里の違ひとさへいふではないか、信仰に入ると否とは、一念のすえどころである、一念、道に志せば、これが成佛の口となるのである、されば一念隨喜の功德の、超勝して居る事を宣説し給へる佛意はいかにも、肝銘にたへぬではないか、斯くて釋尊は、更にこれより聽法の功德を説かせらるゝのである。

#### 〔四〕 聞法の利益

この娑婆世界は、耳根得道の國であると、日蓮上人は仰せられたが、誠に剴切な聖訓である、本品には、聞法の功德を説かせられて、

若人、是の經の爲の故に、僧房に往詣して、若は坐し、若は立ちて、須臾も聽受せん、是の功德に縁りて、身を轉じて生るゝ所には、好き上妙の象、馬、車乘、珍寶の輦輿を得、及び天宮に乗ぜん、

とあつて、勝妙の利益を擧げ給ふた、更に分座聞法の功德は、身を轉じて帝釋の坐處、梵天王の坐處、轉輪聖王の坐處を得んとある、分座聞法といふは、法華講演の處にありて、後より來る人あらんに、座を分けて法を聞かしむることをいふのである。

【註】帝釋の坐處等は、これは華報である、若し果報を以つていふならば、佛の坐處を得ると心得べきである。



分座の功德は、我等にとりて緊要なる經旨である、又次下に、他人を勧め語らいて、共に往いて、法華經を須臾の間にも、聽聞せん人の功德は、轉身して、五十の功德を得るとある、その五十の功德とは、本品に、

- [1]、身を轉じて陀羅尼菩薩と共に、一處に生ずることを得ん、
- [2]、利根にして、
- [3]、智慧あらん、
- [4]、百千萬世に終に寤醒ならず、
- [5]、口の氣臭からず、
- [6]、舌常に病無く、
- [7]、口に亦病無けん、
- [8]、齒垢つかず、
- [9]、黒からず、
- [10]、黄ならず、
- [11]、疎ならず、
- [12]、亦缺す、
- [13]、落ちず、
- [14]、差はず、
- [15]、曲らず、
- [16]、唇下垂す、
- [17]、亦塞らず、
- [18]、縮まず、
- [19]、龜れず、
- [20]、溢らず、
- [21]、瘡す、
- [22]、疹れず、
- [23]、亦缺けす、
- [24]、壞れず、
- [25]、嗚み邪らず、
- [26]、厚からず、
- [27]、大ならず、
- [28]、亦齧黒まず、
- [29]、諸の惡むべきこと無けん、
- [30]、鼻漏匿ならず、
- [31]、亦曲り戻らず、
- [32]、面色黒からず、
- [33]、亦狭く長からず、
- [34]、亦竄まず、
- [35]、曲らず、
- [36]、一切の喜ぶべからざる相あること無けん、
- [37]、唇、
- [38]、舌、
- [39]、牙、
- [40]、齒悉く皆嚴好せん、
- [41]、鼻修く、
- [42]、高く直く、
- [43]、面貌圓滿に、
- [44]、眉高く、
- [45]、長く、
- [46]、額く廣く、
- [47]、平正にして、
- [48]、人相具足、
- [49]、世々生れん所には、佛を見たてまつり、
- [50]、法を聞いて教誨を信受せん、

と、この五十の功德を現身に得たならば、如何程樂しきことであらうか、本品を拜見するにつれて、我が相好と、人の相好とを見て、自ら深く内省慚愧の念を生じ、ますます法華正義の、信仰を策勵せんと思ひのである、本品の結文に、

阿逸多、汝且く是を觀ぜよ、一人を勸めて、往いて法を聽かしむる、功德此の如し、何に況んや、一心に説を聽きて讀誦し、而も大衆に於て、人の爲めに分別し、説の如く修行せんをや、

この經文を拜するに、一心聽説は、初隨喜品であつて、讀誦の第二品も、説法の第三品も、この經文中に、明了に知ることが能き、第四第五の兩品は、如説修行の文字に具はつて居る、これが本品の結歸である。

斯く本品を要解するに連れ、佛意の程を深く信じ、固く思はなくはならぬ、一念信解の功も、初隨喜の徳も、吾等行者の聞法より來るものである、末代法華成佛の眞因は、全く聞法下種である、日蓮上人曰く、

一念信解の功德は、五波羅密の行に越へ、五十展轉の隨喜は、八十年の布施に勝れたり、頓證菩提の教は、遙に群典に秀で、顯本遠壽の説は、永く諸乘に絶へたり。

### 法師功德品第十九

#### 一 本品の生起

我等の信仰には、自行といつて、自己の爲に修行を勵み、進んでは化他といつて、この法華經を以て、一人でも多くの人を、教へ導かんとする心が出来、前の隨喜品に於ては、薄徳淺智の行人である名字即——佛法の名のみを聞く人——の人の、一片

隨喜の功德の甚大なる事を説き、經力の廣大無邊なることを知らしめたのであつて、本品は正しく、相似即——本品に説く六根清淨を得たる人——の功德を宣説し、六根清淨の徳を得ることを、明かし給ふて、末世法華經の流通を勧め給はん爲に、本品は生起したのである。

#### 二 題名の解釋

「法師功德品」といふのは、法師とは法華經を修行し、弘通宣傳の任に在るものを指していふのである、既に迹門の法師品に、法師のことは述べて置いたが、本品の受持、讀、誦、解説、書寫の五種法師が、本門の經力によつて、更に現身に六根清淨の功德を得る事を明し、本門開會の妙旨を示すので、法師功德品の題名があるのである。因に此品は、十界の形相、音聲等の實在を宣説すること、眞に奥妙を極めてゐる。

〔三〕 六根清淨

爾の時に佛、常精進菩薩摩訶薩に告げたまはく、若善男子、善女人、是の法華經を受持し、若は讀み、若は誦し、若は解説し、若は書寫せん、是の人は、當に八百の眼の功德、千二百の耳の功德、八百の鼻の功德、千二百の舌の功德、八百の身の功德、千二百の意の功德を得べし、是の功德を以つて、六根を莊嚴して、皆清淨ならしめん、

此の經文は、法華修行の法師は、六根清淨の功德を得るといふことを、對告衆として常精進菩薩へ、釋尊が告げ給ふたので、總じて、六根に六千の數の功德が説かれてある、今六根の功德を配當すれば、經文の如く、次に示す通りである。

眼——八百、耳——千二百、鼻——八百、舌——千二百、身——八百、意——千二百、

の數字を以て、功德を宣べ給ふてはあるが、勿論、暫らく數を以て、功德の無數を顯はされたことを忘れてはならぬ、而して此六根が、互具、互融するのを清淨の徳といふのである。

今一例を擧ぐるならば、眼でものをいふといふことは、誰人にでも信じ得らるゝ所であらう、されば耳でものを食するといふ意味も信じねばならぬ、人は食物は口にのみ食ふものと思ふてゐるが、これは淺慮の次第である、耳で食するとは斯様である、心に何か一つの心配事があつて、氣鬱ぎ、心進まず、快々樂まず、悲觀より悲觀へと、なつてゐる時に、其人の心の奥底に、秘した煩悶と懊惱とを知つて、これを慰安し、教化し、啓發するならば、従つて顔色にも生氣が現はれ、自ら快く食し得らるやうになるであらう、斯様な實例は、枚舉に遑ない程、實見することが能きる、この意味で、六根がそれ〴〵互に、はたらき得らるゝ徳が生るのである、次に六根の功德を一々要解しやう。

根、といふことは、能生を以て義とするといふであつて、我等の、一切の行動を起す源泉をいふのである、その根に、六つのものがあつて、眼、耳、鼻、舌、身、意がそれである、即ちこの六つのものが、動力となつて、我等の日常百般の行動は、起り來るのである。

一、眼根清淨とは、

經文に、

未だ天眼を得ずと雖も、肉眼の力是の如くならん、

とあつて、法華經修行の人の眼は、肉眼其儘で、天地法界を達觀し、總有るものを見究めることが能きて、上は有頂天、下は阿鼻獄に至る迄、一切の事を残りなく、徹見す功德があるのである、涅槃經にも、

大乘を學する者は肉眼なりと雖も、名けて佛眼と爲す、

とあるが、吾人の凡眼に、如來眼を得る事をいふのである。

二、耳根清淨とは、

經文に、

是の法華經を持たん者は、未だ天耳を得ずと雖も、但所生の耳を用ふるに、功德已に是の如くならん、

とあつて、此の行人の耳は、凡夫の耳なれども、娑婆三千大千世界の、ありとしあらゆるもの、音聲を、のこりなく聞き分け、少しも違ふことなく、如來耳の徳を得るのである。

三、鼻根清淨とは、

經文に、

法の如く修行する、香を聞きて、悉く能く知らん、未だ菩薩の、無漏法生の鼻を得ずと雖も、而も是の持經者は、先此の鼻の相を得ん、

とあつて、此の三千大千世界の、一切の有情非情の香を嗅ぎ達して、少しのあやまり

なき、如來鼻の徳を得ることである。

四、舌根清淨とは、

經文に、

是の人は舌根淨くして、終に惡味を受けじ、其の食噉する所有るは、悉く皆甘露と成らん、

とあつて、常に法味を受くるものは、苦きものも、澁きものも、如何なる不味いものでも、其の舌に上るならば、皆變じて上味となり、甘露となる、この事は我等が常に實感することが能きるではないか、よく世間にもあるが、食に苦情をいひ、不足をいふ人は、清淨の反對であつて、上味を變じて苦味とする人である、誠に憫むべき人である、須らく法味を受けて、法悦の生活に入つて、「皆變成上味」の經文の如く、如來舌の徳を得、一切味を淨化する徳を得ねばならぬ。

五、身根清淨とは、

經文に、

若法華經を持たば、其の身甚だ清淨なること、彼の淨瑠璃の如くにして、衆生皆見んと喜はん、

とあつて、此の經を持つ人は、其の身の清きこと瑠璃の如く、法界三千の因果苦樂を、自己の身に悉く現するので、是れが事の一念三千の當相である、これを信解したならば、凡身が體て佛身であることも明かになるであらう。

六、意根清淨とは、

經文に、

是の人は意清淨に、明利にして穢濁無く、此の妙意根を以つて、上中下の法を知り、乃至一偈を聞くに、無量の義を通達せん、

とあつて、この經を持つ人は、一を聞いて萬を解り、一を説いて限を盡す徳を得て、一切衆生の心相に達し、これに對する順應力を生むのである、本品にも、

諸の所説の法、其義趣に隨ひて、皆實相と相違背せじ、若俗間の經書、治世の語言、資生の業等を説かんに、皆正法に順せん、  
 と、日蓮上人が、俗諦開會の妙談を、大に發揮し給ふた金句はこれである。  
 本品の六根清淨の徳については、天台一流の釋があるが、我等は本品の功德に感奮して、信行不退、ますます流通宣傳を勵むの、道念を増進しなくてはならぬ。

### 常不輕菩薩品第二十

#### 一 本品の生起

本品は、法華修行の上には誠に大切な經典である、日蓮上人が、  
 一代の肝心は法華經、法華經の修行の肝心は、不輕品にて候也、不輕菩薩の人を敬ひしは如何なる事ぞ、教主釋尊の出世の本懐 人の振舞にて候けるぞ、

と教へられたのを拜しても、明らかに修行上大事なことが了解せらるゝのである。

本品は、本師釋尊が、宿世往事の因縁に托し、不輕菩薩の過去の本事を説き給ふて、法華修行の行人に、信毀罪福の現報を明かし、正しく六根清淨の利益を得たる證人を擧げ、吾等本具の佛性を知らしめ、人生尊重の妙旨を顯はし、末世法華經の流通を策勵し給はん爲めに、生起したのである。

#### 二 題名の解釋

「常不輕」とは、本品の中に、  
 爾の時に一りの菩薩の比丘有り、常不輕と名く、得大勢、何の因縁を以て常不輕と名くる、是の比丘凡を見る所有る若は比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷を皆悉く禮拜讚歎して、是の言を作さく、

本品の生起 題名の解釋

我深く汝等を敬ふて敢て輕慢せず、所以は何ん、汝等皆菩薩の道を行じて、當に作佛することを得べし、

とあるので、四衆のもの嘲けり名けて、常不輕といつた故に、この題名があるのである、四衆を輕ろしめないのは、佛性の尊きを見るが故で、我等本具の佛性を見たならば、人生の根本尊重の妙旨を發揮するに至るものである、日蓮上人は、

不輕菩薩は、所見の人に於て、佛身を見る、

と示し給はれたが、この間の有り難い消息を信解するならば、人生に光明を認め、人間を輕んじ、賤める淺劣な教義を捨て、法華の正義を信ぜずには居られない筈である。

### 〔三〕 信毀の罪福

本師釋尊は、得大勢菩薩を對告衆として、四衆のもの、此の法華經を持ち修行す

るものを、惡口、罵詈、誹謗の事があるならば、佛を誹謗するよりも、重い罪の報ひを獲得であらう、それに反して、受持修行の人は、法師功德品の中にある六根清淨の福報を得らるゝであらう、と説かせられた、この信謗順逆の現報を説かせられたのは、末世流通を激勵せらるゝ佛意が、その中に伺はれる次第である。

また得大勢菩薩に仰せらるゝには、今より無量無邊の古昔、威音王如來といふ佛が在りました、その佛の國を大成といつたが、その佛の涅槃の後に又復、威音王如來といふ佛が現はれ、それが次へくと、其數二萬億の多き佛であつて、名號は皆同一であつた。

しかも、最初の威音王如來の入滅の後、像法の御世に、常不輕といふ一人の菩薩比丘があつた、此の菩薩は四衆を見て、斯くの如きの語を唱へて禮拜して居つた、我深敬二汝等二不敢輕慢二所以者何汝等皆行二菩薩道一當得二作佛一

この二十四字は、實に深き意味のあることで、それはこの菩薩は、人々の心の奥底

に具はつて居る佛性を見るから、何人をも尊きものとして敬ふのである、であるから法華の教義は、罪惡の子よ、迷ひの人よと、叫ぶものでなく、汝自身は尊き光りあるものである、と教へたのである。

さて常不輕菩薩は我敢へて、汝等を輕しめず、汝等皆、當に作佛すべきが故に、と人毎を禮拜し、合掌した、見る人、聞く者、却つて無智であり不明であるから、怒り罵り、彼に迫害を加へることが激しかつた、されど彼は、毫しも怯む氣色もなく、但行禮拜を續けた、四衆の怨嫉は愈々加はつて、僞れる授記をいふもの、我を迷はすものなりと、杖木瓦石を以つて打擲までするに至つた、けれども、彼は避け走り遠く往つ、高らかに、我敢て汝等を輕しめず、と言ふて更に退き止めるような事は無かつた、流石の増上慢の四衆も、あきれはて、彼を呼んで常不輕と言ふに至つた。

この常不輕菩薩は、命終せんとするとき、空中に於て威音王佛の説き給ふ、法華の説法を聞いたので、彼はこの法華經を受持し、六根清淨の徳を得て、將に臨終すべき壽命を、永き間増益し、廣く人の爲めに、此の法華經を説いた、前に罵り迫害を加へた増上慢の輩も、其の説法を聞いて、皆信伏隨從した、而して不輕菩薩は命終の後、無量の佛に値ひ奉り、法華經を受持し、讀誦し、説法修行して、六根清淨の徳を得、終に成佛を作ることを得るに至つた。

四 不輕の往事

斯様に、不輕菩薩の往事を説いて、六根清淨の得益を擧げさせられたが、經文にもある如に、爾の時の常不輕菩薩は、誰れでもない我れ釋迦牟尼である、その時の増上慢の四衆の人達は、千劫の間地獄に墮ち、大苦惱を受けたが、先の大因縁に因り、また不輕菩薩に遇ふて、教化せらるゝに至つた、この事を、日蓮上人は、「人の地に倒れて、還て地に依りて起つが如し」と仰せられてあるが、日什正師は、不輕大士の往事を引いて、而強毒矢の逆縁を擧げ、逆即是順の圓意を顯はす、



と示されたが、まことに法華の經力の限りないことが信ぜらるゝのである。  
 この増上慢の四衆は、誰れでもない、今この會座の中の跋陀波羅等の五百の菩薩及び比丘や優婆塞の類であるぞ、と説かせられた、この法華經の經力は、逆縁ですら成佛するのである、況して順縁信仰の者は、成佛疑ひなしと勧め、功德の流通を顯はし給ふたのである。

本品は、所詮何事を説き示されたのであるかと言へば、我等衆生に佛性の具はれることを説かれたに外ならぬのである、換言すれば、一切の衆生は、悉く成佛することが能きるといふ事を宣説されたのである、それが反つて、罵詈雑言の迫害となつた、されど一歩も退くことなく、二十四字を唱へ、合掌禮拜を續けられた、これは日蓮上人の法華弘通の清濁と、徹を一にして居るのである、末法の弘通は、折伏正意である、日蓮上人一生の態度は、不輕品に依り給ふたので、過去の不輕品は今の勸持品、今の勸持品は過去の不輕品なり、今の勸持品は未來の

不輕品たるべし、其時は、日蓮即ち不輕菩薩たるべし、と仰せられて居らるゝが、眞に現在の迫害は勸持品の身讀、過去の迫害不輕菩薩の修行は、日蓮上人御一生の上に見ることが能きるのである。

本品の大意を要解するに當り、一言すべきことは、念佛の一門が、この尊き國土を厭ふて、往生極樂を願ふのも、禪家が眞の解脱に入らずして、人生を嘲り、眞言一流が、人間を輕侮する等の邪義邪説は、この不輕品の經旨に、一點の疑義なく、よく照破さるゝことである。

人間を輕賤するの徒輩を、日蓮上人が感諭されて、  
 鷗の高く飛んで下し視るが如し、  
 と仰せられた、今の各宗が不輕品の經意を信解せず、體得せず、教化の大本を立てずして、徒らに、萬犬の嘘に吠ゆるが如きは。痴態の極みと言はねばならぬ、須らく不輕品の經旨を體得すべきある。

### 如來神力品第二十一

#### 〔一〕 本品の生起

上來 分別功德品より不輕品に於て、釋尊はいと懇ろに、法華經流通の功德の廣大なる有様を説かせ給ふたので、地涌の大菩薩達は、一心に合掌し、尊顔を瞻仰して、この法華經を、佛滅後に、廣く弘通せんことを、誓願するに至つた、すると釋尊は、十種の大神力を現はし、經力の限り無き事を示し給ふて、四句の要法として、この法華經を、本化上行菩薩に塔中に於て、別付屬し給はんとするのが、本品の生起であつて、地涌の菩薩達が、心を纏め身を纏め、而して餘念雜念を去つて、斯の經の弘通を、釋迦牟尼佛に向つて、誓ひ上る、一心、合掌、瞻仰尊顔のその姿は、實にも尊く美しく拜せられた。

#### 〔二〕 題名の解釋

本品を「神力品」と名くる所以は、經文の中に、一切の衆の前に於て、大神力を現じたまふ、とある如に、又偈文の中には、衆生を悦ばしめんが爲の故に、無量の神力を現じたまふ、とあつて、如來が不可思議の大神通力を現じ給ふがために、斯くは題名があるのである、日蓮上人は、神力の事について、所詮妙法蓮華經の五字の神力なり、と仰せられた、要するに神力とは、久遠本佛の功德の妙用をいふので、この品には、それが十種に示されて居る。

〔三〕 十種の神力

十種の神力とは、一に舌相、二に放光、三に警效、四に彈指、五に地動、六に普見大會、七に空中唱聲、八に咸皆歸命、九に遙散諸物、十に十方通同、これをいふのである。

一、舌相とは、經文に、

廣長舌を出し上梵世に至る、

とあつて、印度では廣く長き舌は、過去世に於ける不妄語の徳で、福相なりとする風習がある、釋尊が舌相神力を現せられたのは、云ふ迄もなく、法華經は、一字一句たりとも、皆眞實で、不妄語なることを、證明せんとの爲である。

二、放光とは、經文に、

一切の毛孔より無量無數色の光を放つ、

とあつて、佛智の廣大を表するのである。

三、警效とは、經文に、

舌相を攝めて一時に警效す、

とあつて、通俗にいふセキ、バイの事である、將に大事を語らんとする状態で、一會の衆に注意を與ふるのである。

四、彈指とは、經文に、

俱共に彈指したまふ、

とあつて、隨喜を表し、他を警覺する印度の風俗で、ユビハヂキするのである。

五、地動とは、經文に、

地皆六種に震動す、

とあつて、警效、彈指の二つの音聲が、徧く十方の諸佛の世界に至ると、地は皆六種の震動をなしたが、これ天地感動の現である。

六、普見大會とは、經文に、佛の神力を以つての故に——釋迦牟尼佛、多寶如來と共に、寶塔の中に在して、師子の座に坐したまへるを見たてまつる。

とあつて、十方世界の衆生等は、靈山會上に於て、釋迦、多寶の二佛が、寶塔の中に坐し給ひ、無量の菩薩及び四衆が、それを圍繞したてまつれる有様を見ることができたのである。

七、空中唱聲とは、經文に、即時に諸天虛空の中に於て高聲に唱へて、とあつて、諸の天人は、汝等當に妙法蓮華經を深心に隨喜渴仰し、而して釋迦牟尼佛を禮拜供養せよ、と高聲に唱へたのである。

八、咸皆歸命とは經文に、彼の諸の衆生、虛空の中の聲を聞き已りて、合掌して娑婆世界に向ひて、是の如き

言を作さく、南無釋迦牟尼佛、南無釋迦牟尼佛、とあつて、十方世界の一切衆生は、空中の高聲唱言に應じて、悉く皆、南無釋迦牟尼佛、南無釋迦牟尼佛と、釋尊に歸命したてまつ、た、この咸皆歸命は、釋迦牟尼佛へのみの如ではあるが、上の空中唱聲の條に、法華經に深心に隨喜し、而して亦釋迦牟尼佛に禮拜せよとあるのであるから、南無釋迦牟尼佛と、歸命の言葉の中に、南無妙法蓮華經は、自ら具はつて居るのである、故に日蓮上人は、

神力品の十神力の時、十方世界の一切衆生一人もなく、娑婆世界に向つて、大音聲をはなちて、南無釋迦牟尼佛、南無釋迦牟尼佛、南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經と一同にさげびしが如し、

と仰せられた。信仰に志す者は、よくこの聖判の意を解して、人法不二の妙理を會得する事が大事である。

九、遙散教諸物とは、經文に、  
種々の華香、瓔珞、旛蓋及び諸の嚴身の具、珍寶、妙物を以つて皆遙かに娑婆世界に散づ、

とあつて、十方より散ずる所の珍妙なる諸物は、雲の集まるが如く、而して一々が、寶の帳と變じて、諸佛の上を覆ふた。

十、十方通同とは、經文に

時に十方世界通達無礙なること、一佛國土の如し、

とあつて、時も時、十方世界は、この娑婆世界と無礙融通して、一佛國土となつたのである。

以上の十神力、何れも皆大事であるが、殊にこの第十の如一佛土の神力は、國土の開會を表はすものであつて、眞に國土嚴淨の妙旨を示されたものである。

この十種の神力を、日蓮上人は、

此十神力は、妙法蓮華經の五字を以て、上行安立行淨行無邊行等の四大菩薩に授與し給ふなり、前きの五神力は在世の爲め、後の五神力は滅後の爲めなり、爾と雖も、再應之を論ずれば、一向に滅後の爲めなり、と仰せられたが、仔細に經文を拜すれば、聖意の存するところを信解したてまつることが能きる。

〔四〕 塔中の別付 〔稱歎付囑〕

今や、釋迦牟尼佛は、十種の大神力を現はし給ひ、こゝに滅後弘經の使命を、多寶塔中の別付囑として、將に本化地涌の四大菩薩の上に、下されんとするのである、その付囑の儀式に四通りの様がある。

一、稱歎付囑 二、結要付囑 三、勸獎付囑 四、釋付囑、である、  
今は正しく四種付囑の中の、第一の付囑で、稱歎して大法を付囑せらるゝのであ

塔中の別付

る、その文の中に、佛自ら神力を現し給ふ所以を宣べて、  
 囑累の爲の故に、此の經の功德を説くとも、猶盡すこと能はず、  
 とある。この經意を略述するならば、如來の如何なる神通を以ても、この經の功德を、  
 説き盡すことは能きない、と、釋尊は自ら、法華の功德の絶大なることを稱歎遊ばされ  
 た、それは、吾相至梵天の神通を以て、不妄語を證するも、法華經の眞實を證するに  
 は、猶ほ及ばざる所がある、通身放光の神通を以て、眞理の光りを證するも、法華經  
 の智慧の光りに比べては、猶ほ足らざる所がある、といふ風に、餘經にその比類を見  
 ないこの十種の神力を以てさへも、法華經の功德を、宣べ盡し得ないと、飽く迄も稱  
 歎あそばされたのが、この稱歎付囑の意である。

〔五〕 塔中の別付 〔結要付囑〕

これから本品の大事、四句の要法について述べよう、この四句の要法を、天台大師

は、五重玄義——天台大師は法華經を講ずるに、名、體、宗、用、教の五つを以つて  
 解釋された——に釋し、日蓮上人は、妙法蓮華經の五字として、一期弘通の正意とし  
 給ふたのである、本經に、

要を以て之を言は、如來の一切の所有の法、如來の一切の自在の神力、如來の一  
 切の秘要の藏、如來の一切の甚深の事、皆此の經に於いて、宣示顯説す、

如上の經文を、五重玄義に配するならば、

- 如來一切所有之法……………名
- 如來一切自在神力……………用
- 如來一切秘要之藏……………體
- 如來一切甚深之事……………宗
- 皆於此經宣示顯説……………教

「名」は、妙法蓮華經の五字、「用」は、斷疑生信、「體」は、一念三千、「宗」は、本因本果、

「教」は、法華經をいふので、固より、名の體、用の體、體の體、宗の體、教の體は何れも皆、妙法蓮華經である。

更にこれを要解するならば、四句いづれにも、如來の語を冠してあるのは、壽量品に顯はれたる久遠本佛の、お悟りを説き示されたものであるからである。

如來一切所有之法とは、釋に、「一切皆歸妙法」とある如に、如來が、法界三千の萬法、一として漏るゝことなく、證得して一の妙法の中に、攝められて居ることを示すのである。

如來一切自在神力とは、釋に、「通達無礙にして、八自在を具完せるもの」とある如に、如來の自在の力用の限りなきを示し給ふたのである。

【註】八自在とは、涅槃經に云く、一には一身多身を示すこと、微塵數の如し、二に、一塵身を以て大千界に滿つ、三に、大身を以て軽く上り遠く到的、四に、無量の類を現すれども常に一國に居す、五に、諸根互用す、六に、一切の法を得れども無得の想の如くす、七に、一偈の義を説くに無量劫を經、八に、身、處處に通ずること猶虚空の如し。

如來一切秘要之藏とは、釋に、「一切處に徧して、皆是れ實相なるもの」とあるが、日蓮上人は、實相の理を指して秘藏とし給はず、本佛の本體より發して、形聲の兩益を示現するところが、秘要之藏と聖判せられてある。

如來一切甚深之事とは、釋に、「因果はこれ深事」とある如に、いふまでもなく佛因果の大事を、甚深の事と言ふのである。

皆於此經宣示顯説とは、釋に、「總じて一經を結するに、唯四のみ、その樞柄を攝つて之を授與す」とある如に、此經とは廣くは法華一經を指し、要は五字の妙法をいふのである。

斯様に四句の要法に結んで、妙法蓮華經の五字を、特に無量の菩薩達の中に、本化の御弟子、上行大菩薩に付囑し、讓與し給ふたのである、是を別付囑といふのである、佛命時も違はず、末法に入つて、上行菩薩の再誕として、日蓮上人の出現を見るに至つた、上行再誕の大事は、俗見者流の輕々たる凡眼を以つては、この甚深の大因

縁を解することは六ヶしい、須らく本化信仰の智眼に依つて徹見すべきである。  
 神力別付の法門を誤解し、釋迦本佛を一片の脱佛であるとして、日蓮本佛論を唱ふる者もあるが、これは壽量品の良醫の譬論をさへ、了解し得ないものであつて、良醫は釋迦牟尼佛、良藥は妙法蓮華經、本化土行菩薩——日蓮上人——は、どこまでも、遣使還告の如來使である、如何に時代の相違があつても、壽量の教訓を離れて、斯かる珍奇な説を爲す事は、思はざるも甚しいもので、日蓮上人曰く、  
 日蓮を用ひぬるとも、悪しく敬は、國亡ぶべし。

〔六〕 起塔供養 〔勸獎付囑〕

この結要付囑が了つて、釋迦牟尼佛は、滅後にこの經を受持、讀、誦、解説、書寫し、説の如く修行すべし、と宣べ給ふた、そしてその修行すべき處は、  
 若は經卷所住の處、若は園中に於ても、若は林中に於いても、若は樹下に於ても、

も、若は僧房に於いても、若は白衣の舎にても、若は殿堂に在りても、若は山谷曠野にても、此の中に、皆應に塔を起て供養すべし、  
 とあつて、固より信仰は、時と處とを擇ばぬが、本尊を亂してはならぬ、雜亂をやつてはならぬ、それが本品に、嚴乎として教詔されて居る、起塔供養の四大文字がそれである、起塔せずは何にでも、信仰を捧げ、祈りを致すことは、佛意に非ず、經旨に非ざるものである、塔を起つるとは、本尊を建立せよ、本尊を勸請せよとの意義である、日蓮上人は、明らかに寶塔と本尊とは、異名同義であると、聖判に示されてある、

日蓮が弟子檀那等、正直捨方便不受餘經一偈と、信する故により、此の御本尊の寶塔の中へ入るべきなり、たのもしたのもし。

〔七〕 四處の道場 〔釋付囑〕



四處の道場といふことは、本品にも示されたる如く、我等法華を修行せん處は、誠に四處の靈場である、即ち、佛陀の誕生、成道、轉法輪、入涅槃、の聖境と異ならぬと、明されてある、日蓮上人曰く、  
 日蓮が胸の間は諸佛入定の處也、舌の上は轉法輪の處、喉は誕生の處、口中は正覺の砌なるべし。

〔八〕 要文の解釋

▽上行出現の文、

如來の滅後に於いて、佛の所説の經の、因縁及び次第を知りて、義に隨ひて實の如く説かん、日月の光明の、能く諸の幽冥を除くが如く、斯の人世間に行じて、能く衆生の闇を滅す。

この「如日月光明、能除諸幽冥、斯人行世間、能滅衆生闇」の四句二十字は、末

法に於ける、本化上行菩薩の出現を、豫言し讚美し給ふた經文である、上行再誕の日蓮上人が、五濁の末世に、生をこの大日本國に托し、不惜身命の節を持して、佛教の大義と君臣の明分を闡明され、國と人との爲に、世間出世の迷妄を破つて、法華經の大理想を顯揚された、その一代の歴史は、正しくこの四句に依つて豫言されて居るではないか。

▽畢竟住一乘の文、

無量の菩薩をして、畢竟して一乘に住せ教めん、

この二句は、佛教統一の明文である、既に幾度も述べた如に、釋尊出世の一大事は、我等一切衆生を一佛乘に歸入させて、大菩提を成就せしめんが爲で、爾前四十餘年の教經は、この目的の準備であつた、こゝに、法華經は顯説されて、一切の衆生は皆佛子であり、皆菩薩である、佛子の乘るべき教は佛乘である、菩薩の依る可き經は法華經である、今や、一切の衆生が佛子であるからには、餘乘のある必要もなく、諸經を

持つ必要もない、一切の教經は斯くして、この法華經に攝盡され、統一されたのであつた。

▽受持成佛の文、

我が滅度の後に於いて、應に斯の經を受持すべし、是の人佛道に於いて、決定して疑有ること無けん、

この四句は受持成佛の肝文であつて、如來滅後に於ける、我等行者の信仰の、依止處、安心處である、斯の經とは法華經、別しては妙法の五字を指すのである、受持とは信念、佛道とは妙覺の無上道、決定無有疑とは本佛釋尊の、印可證明である、一點の疑心なく、壽量久遠の本佛を信じ、妙法五字を、受持口唱して、信心を勵む我等末代の行者は、疑もなく「現世安穩後生三善處」の理にかなふのである、日蓮上人曰く、

然れば末代濁世の、謗法闍提五逆たる、僧も俗も尼も女も、此經にて佛に成らんこ

と疑なし、然れば法華經第七に云く、我が滅度の後に於いて、應に斯の經を受持すべし、是の人佛道に於いて、決定して疑あること無けん、此文こそよに、く憑しく候へ。

囑累品第二十二

〔一〕本品の生起

釋尊は神力品に於て、この法華經を結要四句の要法として、本化上行等の大菩薩に、別付囑し給ふたので、當品に於ては未だ付囑に預からざる、迹化他方の菩薩達に、總じて付囑し給はんが爲め、如來は神通力を現じて、右の手を以て、無量の菩薩の頂を摩で給ふこと三度に及んで、總付囑をせさせ給ふので、摩頂付囑とも稱するのである、斯くして本品は起つた。

(二) 題名の解釋

「囑累」といふことは、具に言へば、付囑煩累のことであつて、本品に於いては、釋迦牟尼佛が、迹化他方の無量の菩薩に、神力品に於いて、本化の大菩薩に別付囑し給ふたる、四句の要法を除いた、餘の法華の教法を、付囑し給ふたのである、それであるから煩累といふことは、ワズラハスといふ意であつて、迹化無量の菩薩に、宣傳弘通せしむることを、煩累といふたのである、通途に囑累の一段は、一經組織の上に於て、最終にあるべきであるが、法華經の特色として、囑累の後に、流通段がある、「正法華經」、「添品法華經」には、これが最終になつて居るので、ここには教義上議論もあるのであるが、本化別付の後、引續き迹化の總付囑のあるのも、經家の大に意を用ひられたことが、うかがはれる。

(三) 正付囑

付囑について本品に、三つの付囑が明されてある、一には正付囑、二には釋付囑、三には誠付囑である、正付囑といふことは、如來が菩提の法を、付囑になることである、經に、  
爾の時に釋迦牟尼佛、法座より起ちて、大神力を現じたまふ、右の手を以て無量の菩薩摩訶薩の頂を摩でて是の言を作したまはく、  
我無量百千萬億阿僧祇劫に於いて、是の得難き阿耨多羅三藐三菩提の法を修習せり、今以つて汝等に付囑す、汝等當に、受持讀誦し、廣く此の法を宣べて、一切衆生をして、普く聞知することを得しむべし、  
とあつて、如來は法座より起つて、大神力を現じ、右の手を以て、無量の菩薩の頂を一時に摩で、告げ給ふて、我れ無量億劫に於て、得難き菩提の法を修習した、今汝等

に付囑す、一心に流布し利益せしめよとて、三たび頂を摩で、重ねて前の如く仰せられた、これが正付囑である、摩頂のことは、我等の凡慮では、餘りに奇蹟であるかの感じがあるが、久遠本佛の大神力であるから、斯様のことは疑ふの必要が無い、摩頂は天竺當時の風儀であつて、菩提の法とは法華經のことである。

〔四〕 釋 付 囑

釋付囑とは、菩提の法を付囑する所以を説明して、滅後に於ける、行者竝に弘教者は、衣座室の三軌を、奉すべきことを、明されるのである、經に、  
如來は大慈悲有りて、諸の慳慳無く、亦畏るゝ所無し、  
とある、これを弘教三軌の、衣座室の法門に、配當するならば、「有大慈悲」は如來室であり、「亦無慳慳」は如來衣であり、「亦無所畏」は如來座である。

〔五〕 誠 付 囑

誠付囑とは、如來慧を、信ぜしむることであつて、經に、  
未來世に於いて、若善男子、善女人有りて、如來の智慧を信ぜん者には、當に爲に、  
此の法華經を演説して、聞知することを得しむべし、其の人をして、佛慧を得しめんが爲の故なり、若衆生有りて、信受せざらん者には、當に如來の餘の深法の中に於いて、示教利喜すべし、汝等、若能く是の如くせば、則ち爲、已に諸佛の恩を報するなり、

とあつて、如來の智慧を、憧憬するものには、この法華經を、聽聞せしむべしと仰せられた、餘深法とは、法華經より外の、大乘經のことである、固より如何なる深法でも法華經以外の大乘教では、成佛得脱は、能きぬ次第であつて、今は佛慧に誘引するの經意である。

【註】示教利喜の四字は、如何にも如來教化の、町重なることが深く感じられ、化益のあらはれも、よく領納せらるゝ、今此の四字は、例せば、極寒の時、我等に暖氣を得させやうとするには、まづ暖爐を示し、教へ、あたゝまらしめるのは利であり、我等が快感に打たれるところが喜であるやうなものである。

〔六〕 菩薩の領受

總付囑の中に、正付では菩提の法である法華經を遺囑し、釋付に於て如來の大慈悲を付し、誠付に如來慧を信す可きを付し給ふたから、無量の菩薩大に歡喜して、佛に向ひ共に聲を發し、世尊の勅の如く、當に具さに奉行すべし、唯然なり世尊、願くば慮したまふこと有さざれ、

と、斯様に能化の如來が三輪を以て付囑されたので、所化の菩薩は三業を以てこれを領受した、經に「躬を曲げて頭を低れ」とあるは身業「俱に聲を發げ」とあるは口業、目蓮上人曰く、

「皆大に歡喜し」とあるは意業の領受であつた、能所の感應、眞に歎するに餘りがある、諸の大衆に告ぐ、我滅度の後、誰れか能く、斯經を護持し、讀誦せんものなる、今佛前に於て、自ら誓言を説け、と三度まで諫め給ひしに、八方四百萬億那由他の國土に充滿せさせ給ひし諸大菩薩、身を曲げ低頭合掌し、俱に同時に聲をあげて、  
「如三世尊勅一當具奉行」と三度まで、聲を惜まらずよばりしかば、いかでか法華經の行者には、かはらせ給はざるべき、茫於期と云ひしもの荆軻に頭を取らせ、季札と云ひしもの徐の君が塚に刀をかけし、約束を違へじがためなり、――まして諸大菩薩は本より大悲大受苦の誓ひ深し、佛の御諫なくとも、いかでか法華經の行者を捨て給ふべき、其上我成佛の經たる上、佛慇懃に諫め給ひしかば、佛前の御誓ひ丁寧也、行者を助け給ふこと疑ふべからず。

[七] 諸佛の還士

その時に釋尊は、十方分身の佛をして、その本土に還らしめ、多寶の塔は故の如に閉じさせられた、これは多寶は、法華證明の故に來り、本迹兩門の證明が了つたので、閉塔されたのである。

十方來集の分身は、開塔の爲に集まれるが故に、開塔の儀了れば、本土に還へられたのである、こゝに法華虛空會の説法は終つて、もとの靈山會の説法となるのである、即ち前にもいつたやうに、法華經は二處三會の説法である。

今や總付囑は終つて、靈山一會の時衆は、經に、佛の所説を聞いて、皆大に歡喜す、

とあるが、總付囑し給ふた如來は、化他の佛事を喜び、菩薩は自行の法を得て喜び一會は歡喜に充ち満ちたのである。

藥王菩薩本事品第二十三

[一] 本品の生起

本品は、化他流通といつて、法華經を普く世に流布し、弘通せしめんが爲に、起つたものである、即ち宿王華菩薩が、釋迹牟尼佛に藥王菩薩の本事を問ひ奉つたので、如來は藥王の本事を語つて、この經を弘通せんものは、身輕法重の節に住すべきを教説せられたのである。

末代信者の心得としては、先に四信五品の經旨に依つて宣示せられ、今は弘經の法師の行を明されたのである、本品と次下の妙音品、普門品の三品は、身口意の三業に配當せられて、正しく本品は身業に當り、妙音品は口業、普門品は意業である、化他流通は、本品以下經末に至る迄の五品を總稱するのである。

二 題名の解釋

本品を「藥王菩薩本事品」と題する譯は、前にも述べた通り、釋尊が藥王菩薩の本事を、説かせられたからである、殊に經文に、  
宿王華、若し人有りて、是の藥王菩薩本事品を聞かん者は、亦無量無邊の功德を得ん、

とあるので、題名は明らかである。

藥王菩薩とは、往昔一人の比丘があつて、藥を以つて衆に供養し、衆生の身心の兩病を治せんと誓願して、廣く人を救濟したので、世人舉つて藥王と稱したのである、本事といふのは、その人の昔語りであつて、即ち昔の事を引いて今の事を顯はすのである。

三 藥王の本事

茲に宿王華菩薩は、藥王菩薩の本事を釋尊に問ひ奉つたので、世尊は、往昔、日月淨明德佛の時、今の藥王が一切衆生意見菩薩と稱して、この法華經を修行し、一萬八千歳を満ちて、現一切色身三昧を得た。

【註】現一切色身三昧、十界の何れの色形をも、我が身に現はし得る徳である。

この三昧の徳を得た意見菩薩は、この徳を得た法華經と淨明德佛とに、報恩せんとして、

我れ神力を以て、佛を供養すと雖も、身を以て供養せんには如かじ、  
と有ゆる香油を身に塗り、口に吞んで内外を薰じ、火を身に點じて千二百歳の永い間、捨身供養をされたのであつた。  
するとその身より放つ火の照す世界の諸佛は、

善い哉、善い哉、善男子、是れ眞の精進なり、是を眞の法をもつて、如來を供養すと名く、

と藥王の捨身供養を讚歎遊ばされた、これは何を示されたのかといふに、身は軽く法は重し、身を捨て、佛法に供養すべきを、説かせられたのである、又、布施供養の中には、殉道の精神、護法の至心を第一の施なりと示されてある、淺薄な信者はこの經文を見て、驚倒するであらうが、眞の忠臣義烈の士女の事蹟は、これと徹を同じくして居る、こゝに至つて、始めて眞信仰の境涯であると思ふ。

さてかの意見菩薩は、千二百歳の間身を燃やし、その身が盡き終つて淨徳王の家に生れ、更に淨明徳佛に値ひ、佛を供養したが、佛の入滅の後、追慕の念止み難く、舍利の供養をなし、八萬四千の塔を建てた、而してまた捨身供養として己の臂を燃やしたが、七萬二千歳の永い間燃へて居た、その時に諸の菩薩天人は、意見菩薩の臂の無いのを見て、

此の一切衆生意見菩薩は、是れ我等が師なり、我を教化したまふ、而るに今、臂を焼きて身具足し給はず、

と、嘆いたので、意見菩薩は、

我兩臂を捨て、必ず當に佛の金色の身を得べし、

と誓言さるゝや否や、兩の臂は忽ちに故の如くになつた、これは古來、眞理の火を以つて凡身を焼いた事だといはれて居るが、通解するならば、その意味もあらう、釋尊は、そこでこの意見菩薩こそ誰あらう、今の藥王菩薩であるのだ、と藥王の本事を明かされたのであつた。

これを藥王の捨身供養といふのであるが、斯くの如く佛道を修行する上に、身を捨て、布施し供養する迄に至るならば、最上の布施供養を成じた人といふ事が能きであらう、日蓮上人曰く、

雪山童子の身をなげし、樂法梵志が身の皮をはぎし、身命に過ぎたる惜しきものな



ければ、是を布施として佛法を習へば、必ず佛となる、身命を捨る人、佗の寶を佛法に惜むべしや、又財寶を佛法に惜しまんもの、まさる身命を捨つべきや、世間の法にも、重恩をば命を捨て、報するなるべし。

〔四〕 十喩の校量

斯る尊い法華經であるから釋尊は、次に十種の喩を擧げて比較し、以て法華經が一切の經典に超勝せる所以を明された、これを十喩の校量といふのである、釋に、七寶を以て四聖——聲聞・緣覺・菩薩・佛陀——に奉つるは一偈を持するに若かず、此は財を以て法を況するなり、蓋し法はこれ聖の師なり、能生、能養、能成、能榮、法に過ぎたるはなし。

一十喩の校量は、經に、

一、一切の川流、江河の諸水の中に、海これ第一なるが如く、此の法華經も亦復是

の如し、諸の如來の、諸説の經の中に於いて、最もこれ深大なり。

二、土山、黒山、小鐵圍山、大鐵圍山、及び十寶山の衆山の中に、須彌山これ第一なるが如く、此の法華經も亦復是の如し、諸經の中に於いて、最もこれ其の上なり。

三、衆星の中に、日天子最もこれ第一なるが如く、此の法華經も亦復是の如し、千萬億種の諸の經法の中に於いて、最もこれ照明なり、

四、日天子の、能く諸の闇を除くが如く、此の經も亦復是の如し、能く一切の不善の闇を破す。

五、諸の小王の中に、轉輪聖王最もこれ第一なるが如く、此の經も亦復是の如し、衆經の中に於いて、最もこれ其の尊なり。

六、帝釋の、三十三天の中に於いて王たるが如く、此の經も亦復是の如し、諸經の中の王なり。

七、大梵天王の、一切衆生の父なるが如く、此の經も亦復是の如し、一切の、賢聖、學無學、及び菩薩の心を發せる者の父なり。

八、一切の凡夫人の中に、須陀洹、斯陀含、阿那含、阿羅漢——以上は羅漢の階級——辟支佛、これ第一なるが如く、此の經も亦復是の如し、一切如來の所説、若は菩薩の所説、若は聲聞の所説、諸の經法の中に最もこれ第一なり。

九、一切の聲聞、辟支佛の中に、菩薩これ第一なり、此の經も亦復是の如し、一切の諸の經法の中に於いて、最もこれ第一なり、

十、佛はこれ諸法の王なるが如く、この經も亦復是の如し、諸經の中の王なり。この十喻の校量をよく合點するならば、法華經の諸經に超勝せることは明かになる、秀句に曰く、

釋迦世尊、宗を立つるの言、法華を極となす、金句の校量なり、深く信受すべき哉、

と、世人は、法華經のみ勝れたりといふのを聞いて我田引水の如く考へて居るが、それは迷妄である、十喻の校量に明らかなるが如く、又、日蓮上人は、

法華獨りいみじと申すが、心せばく候は、釋尊ほど、心せばき人は世に候は、何ぞ誤の甚だしきや、

と、一大痛棒を加へられて居る、この勝れたる法華經を受持する者を歎美されて、經に云く、

能く是の經典を受持すること有らん者も、亦復是の如し、一切衆生の中に於いて、亦これ第一なり、と仰せられてある。

十喻の經文は、敢て説明するの必要もないが、壽量開顯の後にこの十喻の校量のものは、開顯の後と雖、如來は懇ろに尙ほ、權實本迹の相違勝劣のあるものであることを知らしめんが爲に、説かれたのである、教の勝劣を知らないならば、理の淺深を

辨へる事が能きぬ、従つて得益の有無も、明らかにならなくなつて來て、信仰の基礎を確立し得ない。

〔五〕 拔苦と與樂

釋尊は十喻の校量を説き終らせられて更に、此の經は、能く一切衆生を救ひたまふものなり、此の經は能く一切衆生をして、諸の苦惱を離れしめ給ふ、

と法華經の功力を宣べさせられた、これが拔苦の經文である、いふ迄もなく、拔苦は消極的、與樂は積極的救濟である、この經の力用功能は、何れより來たり、何れに至り、何れに住まるかといふに、本佛慈念の功德力より發し、聲色妙經に至つて、行者の信念力に住まるのである、

與樂の經文には、十二の利益が示されて居る、即ち、〔一〕、清涼の池の、一切の諸の

渴乏の者に満るが如く、〔二〕、寒き者の火を得たるが如く、〔三〕、裸なる者の衣を得たるが如く、〔四〕、商人の主を得たるが如く、〔五〕、子の母を得たるが如く、〔六〕、渡に船を得たるが如く、〔七〕、病に醫を得たるが如く、〔八〕、暗に燈を得たるが如く、〔七〕、貧しきに寶を得たるが如く、〔十〕、民の王を得たるが如く、〔十一〕、賈客の海を得たるが如く、〔十二〕、炬の暗を除くが如く、

この法華經は、一切の衆生をして、一切の苦、一切の病を離れ、一切生死の縛を解いて、菩提を得せしむるものである。

斯くて經末にこの藥王菩薩本事品に對する聞品の功德の偉大なることを、仔細に擧げられてある、一讀して明了な經文であるから、次に要所のみを引證する。

宿王華、若し人有りて、是の藥王菩薩本事品を聞かん者は、亦無量無邊の功德を得ん——若し如來の滅後、後の五百歳の中に、苦し女人有りて是の經を聞きて、説の如く修行せば、此に於いて命終して、即ち安樂世界の、阿彌陀佛の大菩薩衆の圍繞

せる住處に往きて、蓮華の中の寶座の上に生ぜん、復貧欲に惱まされず、亦復瞋恚愚痴に惱されじ、亦復憍慢、嫉妬、諸垢に惱されじ——是の時に諸佛、遙かに共に讚めて言はん、善哉、善哉、善哉、善男子、汝能釋迦牟尼佛の法の中に於いて、是の經を受持し、讀誦し、思惟し、佗人の爲に説けり、所得の福德無量無邊なり、火も焚くこと能はず、水も漂はすこと能はず、汝が巧徳、千佛共に説きたまふとも盡さしむること能はず、汝今已に能く諸の魔賊を破し、生死の軍を壞り、諸餘の怨敵皆悉く摧滅せり——若し人有りて、是の藥王菩薩本誓品を聞きて、能く隨喜讚美せば、是の人現世に、口の中より常に、青蓮華の香を出し、身の毛孔の中より、常に牛頭栴檀の香を出さん、所得の功德上に説く所の如し。

【註】右の經文の中に於て、即住安樂世界阿彌陀佛大菩薩衆圍繞住處一生蓮華中寶座之上の文は、古來、淨土教の人々が援引して、壽量品に宣示せられた釋迦牟尼中心の佛陀觀、並に娑婆即寂光の淨土觀を否定せんとする唯一の利器とせられて居るのである、從つて天台日蓮兩家の人々に依て、周到な反駁がなされて居る

のであつて、一度壽量品の教義をよく了解するならば、言ふに甲斐なき問題ではあるが、茲に一言して措く事も、亦大切と思ふので少しく要解を述べやう。

法華の中に阿彌陀佛の名は、前後二ヶ所にある、即ち一は迹門の化城喻品に於ける、大通智勝佛の十六王子の成道の下に、

彼の佛の十六の沙彌は、今皆阿耨多羅三藐三菩提を得て、十方の國土に於て、現在に法を説きたまふ——西方に二佛あり、一は阿彌陀と名づけ、二は一度一切世間苦惱と名づく——第十六は、我釋迦牟尼佛なり、娑婆國土に於いて、阿耨多羅三藐三菩提を成ぜり、

とあるのと、この藥王品の文である、先師先哲の釋解は、各方面に亘つて居るが、今は「與」奪の二義を以て、淨土家の誤謬を一言する、與とは一度は先づ彼の主張を容れ、然る後に靜かにその誤謬を指摘するので、奪とは始めから彼の主張の邪義に反對して、その誤解を匡正せんとするのである。

先づ與へていふならば、阿彌陀佛云々と法華經にあるのは、爾前四十餘年の衆生の迷情を、暫時、許した迄のものである、壽量品も説かれざる以前に於ては、三世十方に亘つて、時間的にも空間的にも、釋迦牟尼佛の外に餘佛を認め、寂光淨土の外に他の淨土の存在を認め、從つて阿彌陀佛は、化城喻品では大通智勝佛の第九の王子であり、又この意味に於て藥王品に、往生安樂世界と説かれた譯である、固より藥王品は本門の流通ではあるけれども、壽量品の説かれた後、流通の一段となつては、還り流通して再び迹門の立